九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（一）：第一〜第五話和訳

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院：教授

https://doi.org/10.15017/1912131

出版情報：哲學年報. 77, pp.77-135, 2018-03-13. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（一）

―第一～第五話和訳―

岡野　潔

『ハリバッタ・ジャータカマーラー』は、インドの仏教詩人ハリバッタによって作られた梵文の美文体文学の作品である[1]。その梵文テクストを校訂したミヒャエル・ハーン博士は、この作品が五世紀の最初の四半期頃までにはインドで成立していたと推測する[2]。この作品はインド仏教文学においてアーリヤシューラ以来の一連の製作の伝統をもつ「ジャータカマーラー」という文芸作品のグループに属し、また文体からいえば、散文と韻文がバランスよく交互に用いられる、チャンプーという文学ジャンルに属する。詩芸術としての成熟度の高さから見る時、本作品はインド仏教梵語文学の一千年の歴史の間に陸続と創作され続けた文芸諸作品の中で、ヒマーラヤ山脈の一つの最高峰を思わせる、とりわけ高く突き抜けた作品であると言っても過言ではない。学術的に見て、本作品は五世紀初頭のガンダーラを含む北インドの文化を知る手がかりとなる内容をもち、文化学・仏教思想・美文学・文芸理論、またインド・中央アジアの仏教文学や美術（仏教遺跡の壁画等）など、様々な観点からこの作品を検討することが、学界にとっての喫緊の課題となる。そのためにまずこの作品の近代諸言語への飜訳が急がれる[3]。私もこの研究にあたってはまず飜訳の発表を優先させたい。それによって、仏教説話のパラレルの伝承との比較作業が容易になり[4]、また様々な分野の研究者たちが、それぞれの学的関心からこの作品を検

討することができるようになる。

本論文（一）は、ミヒャエル・ハーン博士の梵文校訂テクストに基づき[5]、本作品の蔵訳も検討した上で、飜訳を第一話から第五話まで行う。第一一話の和訳は私は昨年、別の雑誌に発表した[6]。『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の残りの章についても、出来るだけ多くの章の飜訳を、数年の内に発表して行きたい。このような文学的作品の飜訳では、一般向けの読みやすい自由な訳と、研究者の使用に留意した「硬い」学術訳との、両方のあり方が可能であるが、私の訳は後者であることを意識した。

私が訳文中で用いる、(a) (b) (c) ：という記号の使用は、学術訳としての工夫の一つで、梵語原文の表現の構造を示すためのものである。(a) (b) (c) ：の複数ある修飾句が、傍線を引いた一つの被修飾語に懸かる、修飾関係を示す[7]。また和訳の中で角形括弧〔〕でくくられた言葉は、原文に無いが私が飜訳で文意を補った言葉である。丸括弧（）は、直前にある語句の説明である。また散文と韻文の部分を見分けることができるよう、原文で散文が始まる文の文頭に、◇の記号を置いた。原文が韻文である文もこの飜訳では散文で訳したが、原文が韻文の箇所は字下げをし、詩節の番号を付した。

このハリバッタの作品に取り組むにあたっては、三年前に亡くなったミヒャエル・ハーン博士から、生前に随分と便宜を図っていただいた。ハーン先生が学界に遺されたこの見事な校訂テクストを読む作業は、私にとって生涯の恩師である先生がかつて通られた険しい路を一歩ずつ自分の足で辿ってみる追憶の旅（あるいは、巡礼）を意味している。この作品世界への旅で私が出会う光景は、かつてその路を先に歩いた人が感嘆しながら幾度も眺めを味わった光景であるはずである。感謝の思いを込めて、まずは和訳というかたちでの、この感傷的な旅のささやかな成果を、敬愛する先生の墓前に供えたい。

ハリバッタ作『ジャータカマーラー』（本生譚の花鬘）

オーム、仏陀に帰命したてまつる(8)。

(a)すべての〔六〕波羅蜜の力によって、愛神カーマ(9)を落胆させる寂滅の境地（悟り）に到達された、(b)清浄な徳性の光輪をお持ちになる、(c)暗愚という闇にとっての火（灯明）である、かの聖者（釈尊）に帰命いたします。〔〇・一〕

師・シューラ（ācāryaśūra）がお作りになった諸ジャータカに、同等の〔作品の〕高さをもって、追随することは、他の作者の誰にも出来ません。〔光によって〕夜咲きの白睡蓮を花開かせることは、月だけが出来るのであって、星たちがすべて集まっても〔それを達成することは〕出来ません。〔〇・二〕

このことを私は心得ています、偉大な詩人たちは甚だ阿含（仏教聖典）に精通しているので、その詩作は、世に広まっているのだということを。しかし、自分の目的（自分ならではの仕事）を意欲すること〔のみ〕に熟練した私は、菩薩の行為（ジャータカ）を〔詩で表現して〕広く知ってもらうことにおいて、言葉を用います。〔〇・三〕

世の人々は私の仕事を笑うかもしれません。しかしこれに何の害があるでしょうか。また、恥を知らないと言うかもしれませんが、それは好きにお語りなさい。徳性を得ようと欲し、自分の目的を達成しようと願うなら、人は一切を堪え忍ばなければなりません。〔〇・四〕

釈尊の前世の行い（ジャータカ）を語っているうちに、私は〔菩薩の〕驚嘆すべき徳性を表現することにきっと習熟するでしょう。反復練習によって養われる熟練した能力によって精神が清められた画家は、微笑みつ

つ（容易く）物の形の線を描くのではないでしょうか。〔〇・五〕

人は身・口・意の〔三種の〕浄業（善いカルマ）を、怠惰な心では得ることが出来ません。沢山の花を訪れる蜜蜂すら、努力せずに花から生じる蜜を飲もうとはしていないでしょう。〔〇・六〕

ああ、わずかであっても、仏の徳性を語ることは、よく浄業を生じさせます。いかなる詩人がそのことに対して、不熱心であってよいものでしょうか。高い知性をもつ人は、少しの支出で大きな利得を見込める場合なら、買うことを躊躇すべきではありません。〔〇・七〕

それゆえ、なんとか人間に生まれるを得ることと、闇を打ち破るこの『聖仙の教え』（仏教）とに到達できたので、私は、長い間に『不適切な称賛』という塵埃によって覆われた、〔これまでの私の〕この言葉（言説の行為）を、『仏陀の前生話』[10]という水によって洗い清めたいのです。〔〇・八〕

◇　法話を語って聞かせる人は、まず聖仙（釈尊）の経典を再話し、後に菩薩のジャータカを再話することによって、絵画の陳列場を灯明で非常に明るく照らし出した時のように、聴衆の心に最高の喜びを生じさせます。三界に存在する生き物たちの、不幸が相続しながら続く流れを断つために、偉大な誓願をお立てになった世尊（釈尊）の〔ジャータカの〕行為が語られる時に、聴衆の方々は、まるで『神々の不死の飲物』（アムリタ）を飲まんと強く願うような心で、昏沈（精神の不活発さ）と眠気という過患を追い払い、注意を集中させて、無数の輪廻の苦しみを滅ぼすために、〔この聴聞を〕味わい楽しまれますように。

第一話　光明王ジャータカ

種々の『煩悩』という蛇たちがいる『生存の暴流』という地底の地獄から、生類を救い出すために、仏にな

らんとする広大な誓願は、偉大な精神をもつ者たちでなければ、持ち得ないものです。〔一・一〕

◇　このように伝え聞いています。―過去の世において、(a) 常に花が咲いている諸々の林苑によって美しい〔市街〕周辺の地域や、無数の人の群で混み合う街路・四つ辻・市場や、宝石・黄金の柱列が美しいもろもろの邸宅を、〔その都が広がる〕空間の内に見ることができる、(b) また秋の〔澄み切った夜の〕とても浄らかな月や星々の群によって美しく飾られた天空〔の有様〕のように光輝いている、(c) プラバーヴァティー（輝きを放つもの）という名をもつ、王都がありました。そしてもし全大地を一人の女に喩えるなら、その〔女が身につけている〕真珠のネックレスであるかのように〔光輝いて〕存在するその〔王都〕において、まるで〔そのネックレスのペンダントたる〕一個の大宝石（宝珠）であるかのように浄らかに輝いている、光明（プラバーサ）という名の王がおりました。

彼の宮殿の内部でお化粧をしている間、無垢の水晶の壁に〔像として映っている自分の〕耳飾りや額の飾印（ティラカ）を入念に見つめている女たちの柔らかな手は、鏡を持つことに疲れや苦痛をいだくことはありませんでした(11)。〔一・二〕

〔王に〕親しい者たちは、『福徳』という種子を、『施し』という水によって育てる者である彼を、まるで雨をもたらしてくれる雲であるかのように見ました。しかし敵たちは、武力ある者であっても、まるでただちに落ちてくる雷の火のような、かの〔王の〕怒りに立ちむかうことはできませんでした。〔一・三〕

◇　ある時、このように富の豊かさと武勇とを〔世に〕発現する王が、まるで『暁山』（東の地平にある山）の頂に〔昇った〕太陽のように、無垢の千の宝石を両側に象眼した王座に上り、(a) 〔室内で〕それぞれ指定された処に坐っている婆羅門たち・王たち・属国王たち・大臣たち・使者たちの群や、(b) また門番によって〔入室を〕阻まれている、疑われたその他の者たちや、(c) また外に繋がれている象や馬や貴い車などの、〔総ての〕集まり来たものを眺めていた時に、〔謁見場に〕現れて入室を許可された森林の居住民たちは、地に跪いて、生来の素朴な

心性のために恐怖心に襲われて、どもり、口ごもった口調で、〔次の様に王に〕告げました。

「私たちは山の密林で、象たちの大群の中にいる、まるで白蓮華が集積して山になったかのような純白の象を見たのです。まるで山の下方が〔象の群という〕新しい雨雲の群に覆い隠されている、ヒマーラヤの嶺に似た姿をもつ巨象でした。〔一・四〕

◇　今、その捕獲に関しては閣下のご判断におまかせいたします。」そう言いました。

さて秋が到来して、象の捕獲への興味が増したかの王は、(a) 犂の刃で根こぎにされつつあるムスタ草やダルバ草の根本で起こるばりばりという音が聞こえている、(b) またどこか〔遠く〕で田畑を見張る女が手のひらを〔パンパン〕打ち鳴らしている音と入り混じる〔近くの〕弾指の〔パチンという〕音によって恐れて飛び立った鸚鵡たちの羽に打たれて、熟した褐色のカラマ稲の穂先の並びが揺れ動いている、(c) またご飯を運んでくる女たちに囲まれている農夫たちの近くにひそんで〔伺い〕びくびくしているカラスたちがいる、(d) また泥に濁った沼の水の中に立ったまま反芻している水牛の群が頭を振り動かして、アブたちが〔その頭に〕止まるのが妨げられている、(e) またあちこちぶらぶら歩く牛たちの群が鳴らすベルの音が〔どこからか〕聞こえ、(f) また田んぼでターマラサ睡蓮の茎につまずきながら歩くシャラーリ鳥（アオサギの一種）や雁や番いのオシドリたちがいる、都城と村落とをつなぐ田園地帯を通り過ぎて、〔更に〕(a) 軍隊を恐れて散り散りに〔逃げてゆく〕鹿たちの群で混乱した、(b) また馬たちのひずめに〔踏まれて〕若草の芽葉が切断された、山のその森林の内奥へ、端厳な車に乗り、白い日傘で太陽光線を遮って、入ってゆきました。

すると (a)〔象の〕群の真ん中にいる、(b) 芳しい鮮烈な香りを発するシャッラキー樹をへし折りながら、(c) マダ（発情時に象のこめかみから滴る液体）の流れの筋の近隣を飛び回る蜂の群を軽く耳で打ち叩きながら追いやっている、象王を王は遥か遠方に見ました。〔一・五〕

◇「まずは、あの象とわれらのこの発情期の象（酔象）との闘いを見てみよう」と考えてから、光明王はサンヤータという名の象使いに命じました。「これ（象）から顔面を覆う布を外してやり、あの野生の象と戦うよう、〔われらの〕最強の象を駆り立てよ。」

「陛下のご命令のとおりに。」と象使いは答え、〔通常は〕敵軍をくい止めるのに使うその象を手で打ち叩いて、戦闘意欲を起こしてやり、かの〔野生の象王に〕立ち向かわせました。

二匹〔の象〕が互いににらみ合い、怒りをたぎらせることで、〔分泌が〕最大の量に増加したマダの滴りは幾筋もの流れとなって〔地に〕振り撒かれて、その芳しい香りを地面の塵につけましたが、〔その後〕それらの鉄の閂のような重たい牙どうしが〔激突しあって〕擦れあう音が恐ろしい戦いが、兵士たちによって「こちら側が打ち負かされた、ああ、こちら側が打ち負かされた」と観察されながら、長い間続きました。

(a) お互いに〔打撃を〕はね返すことで顔面〔の皮膚〕は切れ、(b) 目は赤く見開かれ、(c) 激しく〔耳翼を〕ふるわすことで〔両象の〕耳は白雲と黒雲の〔混じり合う〕美として錯覚され、(d) 鼻先をたえず動かしながら怒りのために巨大な鼻を振りあげている、それら二頭の象の〔開いた口に〕、まるで蕾のようなピンク色の口蓋が少し見えていました。〔一・六〕

純白の象王のもつ牙との激突によって生じた火花によって斑点の模様が出来た、王のその象の、牙を保護する鉄の鞘は〔がたがたに〕緩んだものになりました。〔一・七〕

王の象が〔ついに〕その象によって打ち負かされた時、その〔王の〕象の御者は恥じて、うつむきました。

象王は再び彼の群に戻ってゆき、王は心の底から驚愕しました。〔一・八〕

◇ すると象を管理する係官たちが光明王に近づき、意見を述べました。「閣下、われらのこの象たちの全部をもってしても、あの〔象を〕打ち負かすことは不可能です。むしろ呪文を誦した薬草の力によって、あの象を操るべ

きです。」――「そうしなさい」とかの王は返事し、かの王都に戻りました。

彼らはその方法によって、〔マダの〕芳しい香りを発するその象王（香象）を雌象たちで取り囲みながら〔王宮の〕象舎に導いて来て、象用の柱に縛ってから、王に報告しました。「かの象王を連れてまいりました。」

すると〔王は〕象使いであるサンヤータに命じました。「友よ、この象王を調御して、私の乗物にすることが出来るようにしなさい。」――その〔象使い〕は頂礼をもって恭しくお辞儀して王の命令を受け取り、その象に調教を行いました。

象は、その象使いが教える訓練は何でも、まるで利口な勝れた弟子であるかのように[12]、習得しました。〔一・九〕

その後、象使いは〔あらゆる他の〕雄象たちから高慢・慢心を奪い去る、その巨象を連れて〔王の前に行き〕、合掌し、丁重に頭を下げ、王に次の様に申し上げました。〔一・一〇〕

「王よ、調教を終えまして、この象はもう十分に他の王たち〔の進軍〕からの防御に使えます。今や〔王が乗る〕象王としての教練を受けて、発情期すらも、彼を〔乗物として〕用いるのが難しい状態にしてしまうことはありません。〔一・一一〕

〔この象は〕鉤棒（操縦用の打棒）がなくても、竹〔の鞭〕がなくても、御者がいなくても、〔無制御に〕変わってしまうことはありません。もし私が「呑め」と繰り返し促したなら、この象は赤く灼熱した鉄の玉ですら呑むでしょう。〔一・一二〕

それゆえ、宝を鑑定することのお出来になるあなた様は、どうかご興味を起こされて、発情期の狂酔を克服したこの雪山の如き象にお乗りになられ、自ら〔この象宝を〕お調べになってください。」〔一・一三〕

◇ そこで光明王は、まるで秋の季節の真っ白な雲の上に太陽が乗っているかのように、その最高の象の上に乗って、歓喜林（王の娯楽用の園林）での遊びを楽しむために、後宮の女たちを周りに伴って、出発しました。

その時、ゆったり歩いていたその象王は、(a)池で優雅に水を〔自分の〕体にかけながら、(b)白く輝く鉄鎖の破壊を伴って〔足で白い〕蓮根を踏みつぶしている(13)、(c)また満開に咲いた蓮華を鼻の先端で触っている、一頭の雌象を見ました。〔一・一四〕

かの象王は、蓮の繁みの中にいるその雌象を見たとたん、愛欲の矢に心が射貫かれました。御者は荒々しい言葉をとぎれとぎれに発しつつ、制止しようとしましたが、〔象王は〕いっそう早く突進しました。その〔雌象〕は恐れて〔逃げ〕去りました。〔一・一五〕

逃げるその雌象を追いかけて、体でまるで白い線条を曳いてゆくかのように〔猛走する〕象を、馬で急いで追いかけている家来たち〔の有様〕は、まるで風で推進する船を〔川の〕岸辺にいる人々が〔追いかけている〕かのように、すこし見えたのでした。〔一・一六〕

蜜蜂たちの一列の群は、「私はこれまであなたに置き去りにされたことがないのに、あなたのこんな薄情さはどうしたことか」と〔いわんばかりに〕、少しの間、泣きながら彼（巨象）の〔走り去った〕道を追いかけるかのようでした。〔一・一七〕

鉤棒で打たれ続けてついに額が裂けてしまったかの象を、その御者はどうしても止めることができませんでした。人間であっても、〔性の暴走を〕止めることはできないものです。まして、性の欲望に盲目になった、愚かな知性をもつ動物にできるでしょうか。〔一・一八〕

◇

〔その時〕素早く、(a)水牛の角のように薄汚れ森林火災の煙で鼠色になった山の深い稠林に接していて、(b)また非常に険しく危険な地所もあり、(c)象の群によって根こぎにされて〔倒れた〕樹木のてっぺんのまわりに置かれていた鳥の巣が落ちて毀れた卵の殻によって点点と斑点が出来た一つの場所もあり、(d)また〔そのへんに〕虎が食べて残した鹿の死体の肉という残飯に群がる鷲や烏やジャッカルたちがいる、(e)またひどく鋭

いコオロギの声が恐ろしく〔聞こえ〕、(f)また太陽の光線にひどく熱せられた山頂の石の並びがあり、(g)悪人との交際のように嫌らしい〔場所である〕、一つの森へと、その怯えた雌象が走り込むと、かの〔象王〕もまた、性の欲望に駆られて、棘だらけのヴァンシャ樹の枝に擦られたりぶつかったりして傷ついた太股・すね・腕・胸から血を流している王を上に乗せたまま、〔御者の〕鉤棒の打撃におかまいなく、その森の中に入ってゆきました。

熟したウドゥンバラ果の赤みのように赤い顔の色をした樹上に居る猿たちが〔鳴り響いた象の〕ベルの音への好奇心から一瞬静止して見つめている、その雄象は、鉤棒を〔地面に〕落として、クシャ草の叢のために緑暗色である丘陵を越えて去ってゆきましたが、口に草をくわえたまま首をもたげている鹿たちは、〔その後ろ姿を〕しばらく見つめていました。〔一・一九〕

◇　すると、その象の御者はかの王に言いました。「閣下、今やこの象王は、鉤棒もなくなり、悪人のように羞恥心も失っているため、まったくもう手に負えません。もしうまくこの悪象が何かの樹の下を通ることがありましたら、その時閣下はその枝にぶら下がって、自らの身の安全をおはかり下さい」。

王冠も腕輪も首飾りも上着もすでに落してしまっているその王は、命だけは落とすまいと願い、〔死にもの狂いで〕なんとか一本の、鸚鵡たちによって食される果実がまるで鉛丹によって朱色に塗られた美女の下唇に似ている〔実のある〕ニヤグローダ樹の枝へ〔跳びついて〕、まるで久しく別離して〔出会いを〕熱望していた愛する女に対するかのように、しっかり固く抱きつきました。彼はその大樹の枝の上にとどまりました。

〔象の〕耳につけた蠅払い〔の毛が〕樹々の枝の先端によってくしゃくしゃに乱れた象王が行ってしまい、視界から消え去った後、遠方からの〔象の〕ベルのあの甲高い音も、王にはやがて聞こえなくなりました。〔一・二〇〕

◇　さて〔後に残された〕かの王の後宮の女たちは、目に涙をいっぱい溜めて〔後宮の〕住まいに入り、王に対

する悲しみのあまり、床に倒れ伏し、何度も何度も次のような言葉で悲嘆し始めました。

「あの王様はきっと今頃、大地の塵埃でざらざらした、大きな岩があって危険な〔場所である〕、山中のどこかの裂け目に落ちてしまっています。武器も持たずに、恐ろしい森からどうやって戻ってこれるでしょう。〔一・二一〕

(a) 落下して、肩や腕は折れるか脱臼していて、(b) あるいは激しい喉の渇きによって消耗していて、(c) クシャ草の針の棘によって柔らかな足の裏が裂け破れている、あの方は水を欲しがっても、今、どのようにして水を飲むことができるでしょう。〔一・二二〕

あの方は家来たちに囲まれているのに、どうして象によって予期しない災難に導かれたのでしょうか。あるいは、幸と不幸の結果をもつ運命の道とは、そもそも誰も超えることが出来ないものなのでしょうか。〔一・二三〕

もしあの王に何か不幸があったなら、私たちも間違いなく死を願い求めるでしょう。群の長〔たる象〕がライオンに殺された時、雌象たちは山の森でもう〔生を〕楽しむことはありません。〔一・二四〕

ああ、あの象の御者が戻って来て、『めでたくも、あの王は生きておられます』と、報せてくれたら。ああ、もう一度、微笑みが美しい月のようなお顔の、光輝をまとわれた、あの王様を私たちは見たい。」〔一・二五〕

◇ このようにひたすら嘆き悲しんで、〔頬の上の〕葉の装飾文様の化粧が涙で洗い流されている、それらの後宮の女たちを慰めてから、大臣たちは従者たちを伴って駕籠に乗って、順次に出発し、(a) かの象の足が踏んだために押しつぶされた泥やダルヴァ草がある、(b) また〔象の頭から流れ出た〕マダの飛沫が落ちたため草の芽葉の端々に芳香がついていて、(c)〔その上に〕飛び回る蜜蜂の群がたかっている、〔象の〕足跡を〔彼らは〕追跡しました。

やがて山のあたりでその王の家来たちは、(a) 揺さぶられて千切れてしまった通し糸の糸束から重たい中央の宝石が抜け落ちてしまっていて、(b) 芳香ある白い真珠の紐だけが柔らかい草の上に被さっている、〔王の〕ネックレスを見つけましたが、〔それは〕その近くでじっとして怯えている真っ白な蛇がもつ輝きを凌駕して〔白く輝いて〕いました。〔一・二六〕

◇ ネックレスを見つけて、「きっと王様は近くにおられる」と思いながら、彼ら大臣たちはもう少し奥に進み行き、かのニヤグローダ樹のもとで、(a) 喉の渇きで体は窶れて青白く、(b) 髪型は乱れ、(c) きわめて鋭い棘をもつ樹々の枝とぶつかって生じた痛みに苦しむ、かの王を発見しました。

歓喜した心をもつ〔家臣〕たちは、駕籠や馬から下りて、あたかも神々が蓮根の穴から這い出て来たインドラ神に対してなしたように、敬意をもって彼にかしづきました。かの王はその起こった出来事をあまさず、彼らに話して聞かせました。

悦ぶかの大臣たちは、まるで〔森から帰還する〕ダシャラタの息子（ラーマ）のように、彼を最上の車に乗せ、その森林地帯から再びかの都城へ連れてゆきました。かの王が戻って来ると、王都プラバーヴァティーは、心喜ぶ市民たちによって、(a) 塔門にくくりつけた芳しい様々な花の花環の上に蜜蜂たちがとまり、(b) 〔あちこちに〕はたぼこ（幢）やのぼり（幡）が掲げられ、(c) また様々なダンスの祝祭が催され、(d) また街路の空間は香水によって芳香をつけられた、都〔の有様〕へと様変わりしました。

さてまるでバララーマが酔って行った戯れを実演してみせたかのように、その雌象に対して欲情による好奇心を実行してみせたかの象は、恐れと羞恥に心が入り乱れるその象使い（サンヤータ）によって、再びかの王のもとに連れてこられました。

恐怖によって〔体中に〕慄えを引き起こしている象使いを見るやいなや、かの王の両目はたちまち怒りによっ

て、赤く染まりました。まるで花開いた二輪の紅蓮のように。〔一・二七〕

◇　月のように〔美しい〕顔をもつ王は、怒りによって月食（ラーフ）を得た〔月〕のように顔色を暗くして、いいました。「おお、邪悪な心をもつ人、最悪の象使いよ。あなたは誰かにそそのかされて、私をまだ調御されていないこの象に乗せたのですか。そもそもあなたはこう言いました、『この最高の象は私の命令により、赤く灼熱した鉄の玉でも呑むでしょう』と。さあ今、あなたの〔言った〕真実を私たちに見せなさい。」

そして早朝の太陽に似て〔真っ赤に燃える〕火の中から、鉄の玉をいくつも取り出して、象の前に置きました。〔一・二八〕

怯えて〔見つめる〕大臣たちに囲まれている〔王〕は、象使いに命じました。「降りて来て、これらの灼熱した鉄の玉を象に呑ませなさい。」〔一・二九〕

「仰せの通りに」と彼は答え、竹〔の鞭〕を持つと、〔象の〕前で「呑め」と命じました。するとその〔象〕は拒みませんでした。〔一・三〇〕

象がその鉄の玉を呑もうとするのを見て、王はサンヤータに「象を止めよ！」と命じました。〔一・三一〕

その象使いが象を止めると、再び王は言いました。「制御できるのは〔自分の〕体だけであって、この者（象）は〔自分の〕動く心を抑制することはできないのだ。」〔一・三二〕

◇　その時、シュッダーヴァーサ天（浄居天）の神が空中にいました。彼は「もしこの王が仏・世尊たちの徳性の連なりのことを聞いたなら、疑いなく、〔自ら〕仏となることを願う誓願を立てるであろう。それ故この機会を活かし、この象使いに私が入るのがよかろう」と考え、たちまち彼の体の中に入りました。するとサンヤータはかの王に語りました。

「果実だけを食べ、苦行によって痩せ細っている仙人たちですらも、カーマ神（愛欲の神）〔の誘惑〕によって、

身をもち崩すことに導かれます。彼らですら、心を御することが出来ないとすれば、どうして他の者がそれをなすことができるでしょうか。」〔一・三三〕

◇　王は言いました。「まことに、誰が心を制御できようか。」――サンヤータは語りました。

「〔ただし〕仏陀という、過去および未来におられる、一切生類の守護主のみは、実に自分と他者の心を御することがお出来になります。」〔一・三四〕

かの〔王〕は、その象使いから「仏陀」という言葉を聞くと、総毛立ち、まるでその『総毛立つこと』が〔仏への〕浄信（信仰を伴った心の澄浄）を激増させたかのようでした。〔一・三五〕

◇　王は尋ねました。「友よ、まずは、仏陀たちとはいかなる力をもつ方なのかを話して下さい。」――サンヤータは答えました。

「無明の闇によって盲目になっている者たちの〔輪廻界での〕再生を終わらせるため、彼らが悟らねばならない寂滅の境地を、彼ら如来はお悟りになったのです。」〔一・三六〕

◇　するとかの王は心歓喜して、さらに尋ねました。「どうか、さあ今語って下さい。どのようにして仏陀たることに達することが出来るのでしょうか。」――サンヤータは答えました。

「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧をそなえ[14]、努力をもって励みつつある人々は、仏陀たることを得ます。」〔一・三七〕

◇　するとかの王は、仏になるに到る道を認識して、誓願をしました。

「私はすみやかに、生類すべての寂楽のために、布施をはじめとする、数多くの徳性をそなえて、〔彼らが〕悟るべきことがらに熟知した者である、仏陀になることができますように！」〔一・三八〕

清らかな菩薩（王）としての〔王が〕決心して、このように偉大な誓願をなした時、賢者たちは歓喜しました。

しかし自分の〔支配〕力が消え去ることへの憂慮という〔逃れられない〕網の目（罠）の中に捕らわれたカーマ神（マーラ）は、まるで矢に射られた鹿のように、苦悩しました。〔一・三九〕

(a)『心』という土地で育って、(b)もうだいぶそろそろ『憐愍』という最初の開花の時節が現れつつある、(c)人々を喜ばせる、『誓願』という樹に対して、果を〔実らせることを〕切望する王は、〔乞いに来る者たちの〕願いを断ち切らないように〔与え続ける〕財産によって厖大である『布施』という水をもって、まるで一本の樹に対するように規則正しく日々、撒水をしました。〔一・四〇〕

(a)『王としての活動』という天空の広がりを厳飾し、(b)生類を覆っている破りがたい『無知の闇』を打ち破ろうと願っている、『王』という月が〔発する〕、『誓願』という秋の初めにおける清らかさをもつ『布施』という月光は、『乞う人々』という夜の蓮に歓喜を生じさせながら、甚だしく〔地上に〕広がりました。〔一・四一〕

(a)まるで〔自分の群の〕子象たちであるかのように、臣下の者たちをしっかり守っており、(b)まるで雌象であるかのように、繁栄の女神（ラクシュミー）を久しく悦ばせている、象王のようであるかの王のもとに、布施を求める懇願者たちはやって来て、〔象のマダに惹きつけられる〕蜜蜂のように取りまきました。〔一・四二〕

先に〔象使いに対して〕怒りで目をつりあげた時は、火のように近づき難かったのに、その王は、悟りにむかって決意を固めた時、人々にとって湖のような〔清涼さを与える存在〕になりました。〔一・四三〕

人々からは『慳貪』という闇が消えて、次第に〔以前とは〕異なる自性（本性）をもつ心になりました。目に痛みを生じさせる烟りも、集まると〔慈雨を降らせる〕雲となるものです。〔一・四四〕

施与に熱心なその王に仕えている家来たちまでも、布施を与えるようになりました。或るしかるべき〔好適

な〕季節を得れば、多くの樹々も果実をたわわにならせるものです。〔一・四五〕
王が徳性を好むのを見て、臣下の者たちにも徳性への欲求が生まれました。月愛石（宝石の一種、ムーンストーン）は、月の光に刺激されると、清らかな水〔の滴り〕を滲み出すものです。〔一・四六〕
気立てのよい者が、美徳をもつ人々と交際するなら、誰が美徳を愛する人にならないでしょうか。たとえ愚かな知性をもつ猛獣であっても、聖者〔が暮らす〕領域に足を踏み入れるならば、凶暴な本性を捨てるものです。〔一・四七〕
このように象使いの〔語った〕、仏の徳性に相応しい語の響きをもつ美しい声を聴いて、〔過去世の〕釈尊の〔立てた〕その前世の誓願は〔輪廻の〕生存の束縛を断つ原因となりました。〔一・四八〕
◇　さあ、このように、善逝（仏）の徳性の偉大さを聞いた勝れた人々は、生ける者たちの輪廻の苦しみを断ち切るため、仏の位に到達するため、『精進』の鎧を身につけるのです。そのことを考えて、正等覚を得るために努め励んでいる心堅固な者は、まず最初に布施波羅蜜における努力をなすべきです。
『光明王ジャータカ』、第一話〔終わる〕。

第二話　バダラ島ジャータカ

他者の苦しみをもって〔自らの〕苦しみとなし、それ（他者の苦）を阻止するために誓いを立て、生類の益を願い求める方、―そのような方のみが、自らの苦しみをこらえることが出来るのです。〔一・一〕
◇　このように伝え聞いています。―大地の上の王冠〔のような都〕であり[15]、行政手腕と権威の輝きによってあらゆる周辺の小王たちを征服したブラフマダッタ王によって統治されている王都、ヴァーラーナシーにおい

て、(a)〔多くの善行により〕蓄えられた様々な福徳の資糧をもち、(b)無数の学術書や芸事に通じていることによって広く名声を得ていて、(c)喜捨・親切・堪忍などの徳性たちの依処である、(d)また親友・朋友・親族の人々に愛されている、スプリヤという名の菩薩（釈尊の前生）が、一人の隊商長としておりました。

「あらゆる者たちに、常にあらゆるものが与えられねばならない」という、この誓いが、あらゆる生き物に同情心にいだいている彼に起こりました。〔二・二〕

世の生き物たちの不幸を断滅するため、絶えず心をめぐらす偉大な人々においてこそ、決意の気高さの点で偉大な〔このような〕誓いが生じるのです。〔二・三〕

秋における夜の闇を打ち破る偉大な月の出のように、人々を歓ばせる『喜捨』〔の決意〕が、彼の心の中で大きく拡がりました。〔二・四〕

乞いに来る者たちは、「わたしたちのために、この方は福徳の力で得た財産を持っておられるのだ」と思い、彼がもつ財産を〔気兼ねなく〕自分のものであると見なしました。〔二・五〕

まるで『布施波羅蜜』〔という女〕が、「この賢き者（スプリヤ）は、『仏の位』という果実〔が結実すること〕に導く『誓願』という種子を、この『心』という大地に埋めたに違いない」と、そう思ったかのように、彼女は最初に（他の『波羅蜜』の女たちより前に）、まるで激しい情熱によるかのように、福徳をなす彼（菩薩）を激しく固く抱きしめたのでした。〔二・六〕

◇　このように、(a)〔善行によって〕集積された善根をもち、(b)偉大な布施行に専心し、(c)あらゆる生類の益に向かって『憐愍』という鞭によって駆り立てられた『心』という馬をもつ、(d)『不撓不屈の努力』という車に乗った、菩薩を、

まるで他の波羅蜜たちは、「この人は布施波羅蜜をすぐには手放さないでしょうよ」と考えて、彼を待ち焦

がれながら過ごす女たちのようでした。〔二・七〕

◇　さてその偉大な心の方（菩薩）は、まるで夏の太陽光線によって日々吸われて〔減って〕ゆく池の水のように、乞う者たちによって〔日々消費され〕わずかな残りしかなくなった蔵の中の財産を見て、請願に来る者たちの期待に空しく応えることに堪えられないため、『宝石の島』へ旅することを欲して、〔ある日〕(a) 様々な商品を満載しおえた、(b) 高く上げられた帆に遮られて動揺した柔らかな風がある、(c) またとても巧みな操舵手によって舵が握られ、(d) 優秀な船員たちに管理された、一隻の船に、沢山の商人たちを連れて乗り込みました。

いちめんに満開の亜麻の〔青い〕花畑が広がっているかのような、また虚空が〔青い〕水になったかのような〔海へ〕、― その内部において、燦めく蛇たちの宝石の幾千の輝きがあり、深い底なしの水をもつ海へ、彼は分け入って行きました。〔二・八〕

◇　船の進行につれ、たちまち海岸の木々が〔水平線に〕沈んでゆくようであるのを眺め、また風の力によって駆り立てられた大きな波のぎざぎざ（巻き上げられた波頭）が前方を疾走してゆくかのようであるのを眺めながら、次第に大海を越えてゆき、『宝石の島』に到着し、種々の宝石を採ると、かの商人たちと一緒に、何ら妨げに遭うことなく再び引き返したスプリヤは、〔次に〕陸路をとって隊商を率いてゆくことにとりかかりました。

「あの方のもとを訪ねてきた乞う者たちは、決して落胆した顔で立ち去ることがない。あの方の心は、敵であっても息子であっても平等に働く。」― このように、盗賊の集団も、徳行に楽しみ専念する彼（隊商長）がもつ、諸々の美徳を語り伝えているため、隊商の一行を掠奪することはしませんでした。〔二・九〕

生類を益することに専心する、浄らかな道徳心に飾られた人々のもとでは、法から顔を背けた人ですら、まるで善友に〔接した〕時のように、善い生き方に赴くものです。〔二・一〇〕

◇　その後、かの偉大な心の方（菩薩）はヴァーラーナシーにたどり着き、歓喜の心をいだく親族たちに見つめ

られながら、自分の屋敷に入り、それから日々、『宝石の島』から獲得した自分の財産を用いて、乞いに来る人々に丁重に敬意を示しました。

他者のために財をもっており、気高い心をもって布施を与え続ける、かの偉大な心の方（菩薩）の屋敷の門に、乞う者たちは集まり来て、〔そこでは〕どれほど沢山の請願も叶えられたため、門の前から人がいなくなることはありませんでした。〔二・一一〕

◇　さて、ある時かの偉大な心の方は真夜中に貴い寝台の上にいて、次のように考えました。「この財をもってしても、乞いに来る人々にこのように布施を捧げ続けるためには十分ではない。途切れることがない布施によって乞う者たちの心を常にいつも満足させてあげるために、再度旅をなす成果として、〔次は〕どれほどの収穫を私は達成できるだろうか。ああ早くこの夜が過ぎてくれれば、乞いに来る者たちに〔今日も〕敬意を示してあげられるのに。」

あらゆる人は、病気の時や意気阻喪に苦しむ時は、心の安らぎのために眠りを欲するものです。しかしその聖なる人（菩薩）は、「この〔睡眠〕は布施者にとって布施の邪魔である」と考えているので、眠りは苦痛でした。〔二・一二〕

◇　かの偉大な心の方が〔やがて〕眠りの中に沈んだ時、夢の中で、(a) 浄い光の丸い塊から現出した光輪〔の輝き〕の中に浸されている姿をもち、(b) ゆったりと垂らしている蜜蜂の群のように黒い髪の束によって一方の肩が覆われており、(c) 蓮の花びらに似た、暗赤色のぱっちりした眼をして、(d) 黄金の水差しに似た両乳房の上を覆っている真珠のネックレスの大宝石の〔放つ〕光線によってその胸は眩しく輝かされ、(e) 午時花の新鮮な花のようにとても紅い唇をもち、(f) 一条の細い〔腹の〕産毛のすじが〔臍の上部にある〕三条の横の襞の上を梯子として登りながら、くねっている、(g) また月の美しさがそのまま肉体となって具現化したかのようであり、(h)

耳飾りの大宝石の輝きによって頬の上に葉の装飾文様〔の化粧〕は塗油され（色つやを与えられ）、(i) また薄い白い衣で覆われている四肢をもつ、(j) あたかも秋の月の光に包まれている黄金製の像であるかのような、(k) 何にも比べられぬ美貌をもつ、精霊の女を見ました。〔口を開いて〕宝石のごとき露わになった歯の放つ光線によって顔が光り輝いている、かの〔精霊の女〕は、明瞭で甘美な言葉をもって、彼に次の様に語りました。

「あなたの布施への強い情熱によって、あの蔵の中の財は次第に減りました。月の美しい輝きが薄らいで、夜が終わる時、海の潮が引いてゆくように。〔二・一三〕

あなたの繁栄が過ぎ去ったものになる時、乞う者たちは目を伏せて、あなたに背を向けて去ってゆくでしょう。〔雨を降らさない〕秋の雲に対して、もうずっと久しく〔歓びの〕鳴き声をあげるのをやめてしまい、美しい月輪の模様の〔尾の飾り羽〕を下げている孔雀たちのように。〔二・一四〕

そのように蔵の財が尽きるにいたった時、あなたは乞う者たちが来るたびに、悲歎することでしょう。しかしそれでもあなたの与えたいという欲求は甚だ大きく、決して変わることがないでしょう。〔二・一五〕

燃料の材木が尽きた時、ふるえる焔をもつ火の輝きも消えます。しかし意欲的に反復練習を試みることは成功を増大させるものです。偉大な者たちがもつ布施の欲求は、不幸な出来事の中でも〔消えることは〕ありません。〔二・一六〕

「この方は財が尽きようとも、請願の依りどころが消え去る恐怖を、乞う者たちに味わわせることはしない方だ。」――このように人々によって〔施しの〕固い決意が喧伝されている人物は、困難な状況にあっても、その気高い態度を捨てることはないのです。〔二・一七〕

そこで私は輪廻的生存を断ちきる境地を追求しているあなたに、まことの言葉を告げます。――速やかに『不撓不屈の精神』という鎧を着て、人々の幸せのために、バダラ島へ行きなさい。〔二・一八〕

〔今から〕私が説明する、其処への行路をよく聞きなさい。〔その旅路は〕山々やナーガ（龍）やヤクシャ（夜叉）たちのために恐ろしいものであり、沢山ある海が行く手を阻みます。それはあなただけがうまく乗り越えることができるものです。〔二・一九〕

マラヤ山に生える、スダー（甘露）という名の、持続的な効き目がある、好い香りを発する薬草があります。それをギー（バターオイル）で煮て食べなさい。疲労困憊や喉の渇きを払い、飢餓を消すために役立ちます。〔二・二〇〕

五百の島を越え、そして恐ろしい水をもつ様々な川を越え、福徳とたゆまぬ努力をもって筏に乗って諸の海を渡ってから、高い山の上で『偉大なもの』（マハティー）という名をもつ、偉大な量がある薬草を大蛇の毒を消すために採って、そこから〔更に〕進みなさい。〔二・二一〕

◇ 最初に、びっしり密集した葦の林を越えると、海岸で、山の峡谷の狭間に居座るターラークシャという名の羅刹を見るでしょう。

彼は眠っている時、まるで目覚めているかのように、太陽の円輪に等しい瞳がある、燃える火に輝く(16)両目をもっており、〔その開いたままの両目は〕まぶたの〔きわの〕線が薄い赤茶色の睫毛によって縁取られています。また〔その両目は〕覚醒した時、まるで閉じているかのように不動です。〔二・二二〕

眠っている彼の激しい呼吸の〔起こす〕風のおかげで、木々は萎れた白っぽい花をつけています。また顔の口穴から〔蛇のような〕舌がするりと飛び出るのは、まるで恐ろしい雷鳴をもつ雨雲からきらりと輝く蔓のような稲妻が飛び出るようです。〔二・二三〕

◇ 其処からは、ヤクシャや蛇を鎮めるため、過去仏によって説かれた経典の文句を唱えながらあなたは進みなさい。進むとあまり遠からぬ所に、(a)種々の園林の花の芳香をもつ風があり、(b)無数の宝石の輝きに照らさ

れた海の岸辺と山々との間に位置していて、(c) 貴賤様々な人々によって混み合う商店街の路がある、(d) 神々の都に比すべき〔華やかさの〕、ローヒタカという名の都城をあなたは見るでしょう。

其処に、満月の夜の月のように美しい容姿の、様々な美徳を一身に集めている、マーガという名の隊商長がいます。彼があなたにバダラ島へ行く道を教えて導いてくれるでしょう。その偉大な隊商長はしかし重い病気のため、ライオンや虎が恐ろしい山地の森の中〔をくぐり抜けて〕何十里ものの距離を進んだ時に、死ぬでしょう。その時にあってもあなたは失意落胆してはいけません。

心堅固な者たちは、『勇猛果敢』という鎧を着て、生類の利益に向かって、憐愍によって突き動かされて進み、ついに望みを達成するのです。〔二二四〕

◇ 最後に、土地の精霊の力により、また福徳の力によって、ついに長い距離を踏破するを得た時、ヒマーラヤの嶺に似た城壁に囲まれた、門が閉じている銀の都城をあなたは見ることでしょう。そこであなたは再びかの〔過去仏の〕経の文句を唱えるべきです。するとその門は自然に扉を開くことでしょう。

すると (a) 水瓶のような重たげな乳房をもっているため大儀そうな様子をして、(b) 微笑みによって真っ白な歯を輝かし、(c) きれいな弧を描く眉毛の線をもち、(d) 青睡蓮の花びらのような〔ぱっちりした〕群青色の眼をした、(e) 薄く白い神々しい衣を着た、四人のキンナリーたち（妖精女）が、進んで外に出て来るでしょう。〔二二五〕

◇〔彼女たちによって〕やさしい笑いかけや、流し目をすることや、眉毛を意味ありげに動かすことによって愛が明瞭に示されたとしても、あなたは〔自分の〕妹たちであるという想いをなすべきです。彼女たちはあなたにバダラ島への道程を示すでしょう。その後バダラ島の王であるキンナラ（妖精）の王は、土地の精霊に勧められて、あなたに如意宝珠を与えることでしょう。また其処で、(a) 瑠璃（ラピスラズリ）から出来た都城の近隣

に〔自然に〕生じた林苑に〔飛来して〕来て、(b) 耕さなくても播かれる野生の稲の籾殻がない実を食べている、(c) まるで高い秋の雲のように〔気高く白い〕、ヴァラーハカ（雲）という名の馬王をあなたは見るでしょう。彼は目的を達したあなたをヴァーラーナシーまで連れて来てくれるでしょう。」このように語って、その精霊の女はかき消えました。

菩薩は〔このような〕吉祥夢を見たので、強い歓喜心をいだき、「必ずや私はバダラ島への旅で成果を達成することができる」と考えて、精霊たちを供養し、沙門や婆羅門や世の気の毒な人々に喜捨を施してから、精霊の女によって示されたとおりに〔旅して〕、バダラ島に十四年かかって達し、ついにキンナラ王からその如意宝珠を得た時、〔次の様に〕思念しました。「かの馬が〔ここに〕どうか来て下さいますように。」

他者の益の達成のために意を定めて福徳を行ってきた彼が〔そう〕思念すると、まるで月光が集まって一塊りになったかのように燦めいている、かの馬王が素早くやって来ました。〔二一二六〕

ドゥクーラの糸（極めて上質の布糸）で出来ているようにみえる、しなやかで柔らかいたてがみをもつその〔馬〕は、やって来ると、人間の言葉で語りました。「海や山々のために到達しがたいこの都城から、私が空を通ってお前を連れてゆくのは、どの国土か。」〔二一二七〕

徳を愛する、美徳をもつ者たちにとっての鑑である、スプリヤは、月光のように輝かしいその馬王に答えました。「酔った蜜蜂たちが林苑の中に満ちているかのヴァーラーナシーへ、馬王はどうか私を速やかに連れて行ってください。」〔二一二八〕

堅固な勇気をそなえた彼に、馬王は言いました。「私のこの背に乗り、しっかりつかまっているがよい。」〔スプリヤは〕自分の衣服に清らかな光線を放つ宝を結わえると、ガルダ鳥と等しい速度をもつその〔馬王〕にまたがりました。〔二一二九〕

その馬王は、〔空の〕或る場所では切れ切れの雲を蹄でかき分け、また〔或る場所では〕稲妻の輝きによって体を橙色に染め、静かな海の水のように真っ青な空を飛んで、ヴァーラーナシーに降り立ちました。〔二・三〇〕

◇〔馬王〕バラーハカはかの〔菩薩〕を彼自身の屋敷の近くに降ろすと、再びバダラ島に戻って行きました。菩薩は自分の屋敷に入り、心喜ぶ愛する親友や親族たちと会いました。

次の日彼は外に出ると、その如意宝珠をはたぼこ（幢）の先端に掲げて、言いました。

「人にとって得がたいものである〔高価な〕財物を、なんであれ、此処で願う者に、この如意宝珠がそれを十全に授けてくれますように。」〔二・三一〕

◇その頃その地方では、(a) 農夫たちにできる仕事がもはや無くなり、(b) 水気がないために真っ白な雲がきれぎれにまだらに空の全空間に浮かんでいて、(c) カラスの群が餓死した牛の死体にとまっており、(d) 甚だ混雑した困窮者たちの群がいて、(e) 乞食して得られる食物も〔彼らが生きるに〕十分ではない、大変な飢饉がありました。

その時群衆はスプリヤのもとに来て、言いました。「この貴い宝珠が今、穀物を雨降してくださいますように。」――菩薩は「そのようであれ！」と言いました。その偉大な宝珠は、強く思念され、注視されました。すると穀物が空から〔いっせいに〕落下し、或る場所では木々の葉からまだそれがぱらぱらと滴り落ち続けていましたが、巨大な大地はすきまなく穀物に覆われたものになりました。〔二・三二〕

そのあと、輝く光彩をもつ色とりどりの宝石や、まぶしく輝く多くの装飾品、また突風によってひらひら翻る沢山の薄い衣が、幾度も繰り返し天空から落ちてきました。〔二・三三〕

すると乞食する人々は、様々な装身具や衣やティアラを得て、また起こった種々の祝祭やトゥールヤ楽器の

音を〔耳にして〕、驚嘆の心をもって、皆の前に立つかの〔菩薩〕を、あらゆる人に憐れみをなすお方であるとして、次の様に誉め讃えました。〔二・三四〕

「ああ、他の人々を助けるために生を受けたお方の、この達成された御努力の甚だ驚くべきことよ。ああ、ジャスミンの花のように白く輝かしいあなた様の名声によって、この大地は覆い尽くされ、まるで〔白色に〕笑っているかのようです。〔二・三五〕

善に依って〔生きる〕人々は、このような自分の幸せな運命の実現を必ずもてます。なぜなら生類の益のために働いてくださるあなた様のような方々が、実り多い生を送る者として、こうやって誕生なさるからです。〔二・三六〕

大きな苦しみを追いはらい、悩苦の無い大きな果をお与えになったあなた様は、まるで正法の〔行為の〕熟したこと〔のあらわれ〕そのもののようであり、また乞う者たちにとって、安楽となる原因そのものです。」〔二・三七〕

◇ ― さあ、このように、偉大な心をもつ人たちは、自らの苦しみは気にかけず、人々に楽を生じさせ、大きな憐れみをもち、決して誓いを破らないのです。そのことを思い、自分の安楽を顧みず、他者の益のために働くことが巧みであり、悟りに向かって進む者として〔あなた方も〕あるべきです〔17〕。

『バダラ島ジャータカ』、第二話〔終わる〕。

第三話　ダルマカーマ・ジャータカ

〔世の人々の〕無知の闇を追い払うことが出来る者は、菩薩を措いて、他にいません。〔菩薩として生まれ変

わる中で〕或る者は、『教えの詩』（善説）という宝石を得るために、命という代価を払ったのです。〔三・一〕

◇　このように伝え聞いています。―(a)学問や道徳などの徳性がきわだって認められ、(b)また〔彼らの存在は〕地上を美しくする宝飾のようであり、(c)生類に同情心をもち、(d)ヴェーダの吟唱やアグニホートラ（朝夕の祭事）や薪・ダルバ草〔採取〕の仕事を常に行い、(e)謙虚な弟子たちに囲まれた教師たちである、〔或る〕婆羅門の一族に、世の人々の益のために努力される菩薩（釈尊の前世）は、自己の意志力により生まれました。かの偉大な心の方は〔成長して〕毎日美しさを増してゆきました。

あらゆる人々から愛される方が成長するにつれ、まるで光線によって闇を追いはらう月が大きくなる（満月になる）につれて海の水が増大するように、彼の偉大な一族も隆盛に向かいました。〔三・二〕

気高い者たちから尊敬される、大きな福分をもつ或る者が生まれると、〔その〕一族の繁栄は、彼を依処として増大するのです。まるで樹木の蔓が〔樹木を〕依処として成長するように。〔三・三〕

◇　さて(a)大威徳あり、(b)またウパナヤナ（入門式）の浄法をすませ、(c)驕慢で我儘な行為が多い青春期にあるにもかかわらず非行という欠点をもたない、その彼の、きわめて教法（ダルマ）を愛する性質を見て、親族たちはダルマカーマ（法を愛する者）という適した名を〔彼に〕つけました。

徳性をもつ人の名、あるいは〔その〕徳性そのものの名は、福徳（作善の功績）から生じた名前であるため、世間において大抵は愛好されるにいたるものです。〔三・四〕

◇　彼は、複雑・多様な意味をそなえた論書よりも、〔簡素・明解な〕『教えの詩』（善説）のほうがいっそう好きでした。

『教えの詩』を得んと願う彼が、どこからか一つの『教えの詩』を耳にして、〔それを〕憶えた時、総毛立った時に出来る〔皮膚上の赤い〕斑点の着色が、『歓喜』という絵師によって、とても劇的になされました。〔三・五〕

月と同じように、(a) 白浄で、(b) 世間を遍く照らすものであり、(c) 美しく、(d) 黒闇を打ち破るものであり、(d) 到来（āgama 伝承の由来）が広く知られ、(e) 清らかである〔という特徴をもつ〕、『教えの詩』（善説）は、どんな気高い人の心を喜ばせないということがありうるでしょうか。〔三・六〕

〔無知の〕闇を打ち破る者、大変『教えの詩』を熟知する者として、偉大な者たちの集会場において知性の偉大さが有名であった彼は、もし闇を打ち破る『教えの詩』を或る人から聞いた時には、非常に歓喜して、聞かせてくれたその者に百千〔金〕を与えたのでした。〔三・七〕

◇ その偉大な心の方（菩薩）は、どこに行っても、行く先々で人々によって敬意をもって歓迎されました。

その後ある時、邪悪な心をもつ或る一人の婆羅門が、その彼に侮辱を与えてやろうという思いをもっていたため、その気高い人の格別な利得と尊敬が日々増大してゆくのに我慢できなくなり、腹立たしげに、せわしない足取りで、彼のもとにやってきました。

悪人とは、徳性によって得ることができる供養（敬意ある待遇）を他人から得られないため、〔このように〕他の尊敬されている賢者に嫉妬の怒りをいだくものです。〔三・八〕

◇ さて邪悪な心をもつ彼は、まるで婆羅門の姿をとった一匹の羅刹のように、かの大士（菩薩）のもとに来て、次のように言いました。

「あなたは格別の学識という富に達している者であり[18]、甚だ『教えの詩』を愛好する方であると私は聞きました。それ故、〔あなた以外の〕世の人々を蔑む私は、あなたのもとに『教えの詩』という贈物を持ってやって来たのです。〔三・九〕

飛び回る蜂は、よい香りの満開のマンゴーの花房を見捨て、象のマダ（発情期に象のこめかみから流れる芳香ある液）を飲もうと欲して、赴きますが、疑いなく彼はそこに特別な別の徳性を見出しているのです。」〔三・一〇〕

◇　その時菩薩は『教えの詩』という贈物をもっているその婆羅門を見て、歓喜のあまり総毛立つことが発現し始めている美しい姿で、〔座より〕立ち上がって、「ようこそいらっしゃいました、『教えの詩』という大宝石の商人である婆羅門よ。私は『教えの詩』という多くの宝石の買い手となりましょう」と言って、その婆羅門を自分の高い座席に坐らせ、自らは地面に坐りました。

すると親友たちは驚きながらダルマカーマに次の様に言いました。

「〔これから〕私は『教えの詩』を聞くのだ、とあなたの顔は〔すでに夜咲きの睡蓮のような〕微笑みを浮かべています。そして聞き終えた時には、〔あなたの〕両目は涙を溜めて、歓喜のゆえに、どんな美しい輝きを湛えることでしょうか。昼が終われば、好い香りの夜咲きの睡蓮がゆっくりと開花します。そして闇を駆逐する月の光線を受けると、〔それは〕最高に美しい輝きを湛えるのです。」〔三・一二〕

◇　その時ダルマカーマは大変恭しく、かの婆羅門を見つめて、言いました。「〔教えを〕聞こうと願っています弟子に、どうか師はお語りくださいますように。」

するとかの極悪人は彼に答えました。「もしあなたが『教えの詩』という宝石に対する強欲によって、煙も無く激しく燃え上がる炎に満ちた大きな坑の中に自分自身を投げ捨てることができるなら、これまでに聞かれたことがない美しいその『教えの詩』を私は語りましょう。」

すると勇敢な性質によって強められた思考をもつ菩薩は、このように言いました。「自分の苦痛を顧慮しない私のような者にとって、それは困難な行いではありません。ただ、

世の人々の幸せの向上のために、『教えの詩』を私は立派な人々から集めています、樹から果実を集めるように。もし炎が燃えさかる大きな坑に私が入ったら、この人々は一体どうやってそれを受け取るのでしょうか。」〔三・一三〕

◇　婆羅門は答えました。「では〔ここにいる〕全ての人たちにこの『教えの詩』を聞かせてから、火の坑に自分を捨てなさい。」

菩薩は答えました。「師が望むとおりにいたします。

「もし『不撓不屈の努力』という広大な越えがたい大海を、果てしない時をかけて越えてゆかなければ、生類の中にある『暗愚』という大きな闇を破壊する『悟り』という宝石をどうして入手することができるでしょう。〔三・一三〕

そのため、『教えの詩』を熱望するこの私は、水に入るように、〔坑の〕火に入ります。法話に心を奪われて夢中になった私には、火ですら苦痛を感じさせないでしょう。」〔三・一四〕

このように言ってから、人夫たちに大きな坑を掘らせました。そしてそれを火で充満させました。〔ダルマカーマは〕羅刹のような婆羅門を伴って、すぐに住居の中から外に出てゆきました。〔三・一五〕

赤々と燃え上がる火に中に投身しようと決意を固めている、かの偉大な心の方（菩薩）を、目に涙を溜めた友人たちは、厚い友情の故に抱きしめ、制止しました。〔三・一六〕

◇　友人たちや親族の人は悲歎のあまり目にいっぱい涙を溜めて、言葉を詰まらせながら、ダルマカーマに次の様に語りました。―「これはどうなのでしょうか。『教えの詩』の愛好のために、すべきことと、すべきでないこと〔の違い〕を無視して、(a) 清らかな家系に生まれ、(b) 月の光線のように清浄な名声の座にいる、(c) この、容易には手に入れがたい、人間としての生存を軽視して、親しい人々に甚だしい苦しみを味わわせながら、自分を捨てようとあなたは願っているのです。この、正しくない道を進もうとしている理性を引き止めなさい。あなたは〔次の点を〕よく考慮すべきです。

実によく『教えの詩』を熟知する者でありながら、あなたはなぜ、自分の幸せを少しも顧みず、望ましい成

果をもたらしてくれる〔立派な〕息子やまた愛する友人たち以上に、常に人間にとっては最も愛しいものであるはずの、〔自分の〕命そのものを捧げて、一つの『教えの詩』を購おうとするのですか。」〔三・一七〕

◇　すると菩薩はそれらの人々に、『教えの詩』のすぐれた性質を明らかにするために、次の様に法の説示をしました。

ああ、いま集められようとしている聖仙の『教えの詩』が、まるで善き友人〔との交際〕のように、益をもたらさないことが一体あるでしょうか。それは認識を燃え立たせてくれ、〔そして〕理解の光を拡げてくれ、真実を照らしてくれ、誤った道を遮ってくれるものです。〔三・一八〕

それが説かれた時[19]、清らかな光線をもつ太陽が昇った時の蓮華の群のように、人々の精神は目覚めます。大いに黒闇を打破するその『教えの詩』を、自分〔の命〕と交換してでも、賢者はどうして他の者から獲得しないことがあるでしょうか。〔三・一九〕

それ故、私は〔死後も〕如来への道（菩薩道）を歩み行くことを願うので、火に焼かれることを意に介さず、重要な『教えの詩』〔を得る〕ために、身体という篤い謝礼により、尊師に対するように、智慧にとって重要なものに対して、心喜んで敬意を示したいのです。〔三・二〇〕

善行に依り、人間や神に生まれることが得られます。〔しかし〕人々が不死の霊薬（金丹）のような『教えの詩』を得る〔機会が来るの〕は、いつの時かわかりません。〔三・二一〕

◇　それ故、どうかあなた方は、善事をなす立場の私への妨げを生じさせないでください。」――そう言い、それらの親友たちや親族の人々を丁重に制してから、自分自身を完全に炎に化えるために、樹の幹の枝に上って、婆羅門に告げました。「師よ、今、その『教えの詩』をお告げください。」そこで婆羅門は唱えました。

「布施行に巧みで、つねに清らかな戒律の中に住し、『限りない精進』の鎧を身にまとう者たちは、不滅の境

地を得る(20)。」〔三・二二〕

◇　その時菩薩は歓喜した心で、その偈頌をしっかり記憶してから、その人々の集まりに聞かせました。するとかの親友たちは彼にその意義を〔次の様に〕評しました。

「善にこだわるあなたにとって、〔この〕『教えの詩』（善説）は幾度も最高の喜びを生じさせるものなのでしょう。しかしわれわれにとっては心を落ちこませる原因になるものですから、これは悪い言葉（悪説）ではないでしょうか。」〔三・二三〕

◇　その時、其処で、本性において憐れみに濡れたやさしい心をもつ女たちは、かの聖なる方（菩薩）と近い関係にあったわけではなくても、悲しみのあまり、次の様に、ひたすら嘆きました。

「〔口元に〕『言葉』という芳しい蜜が薫り、また『歯のまぶしい光』という花糸がある、このお方のこの美しい蓮の『お顔』を、強い燥きを放つこの火はどうして無慈悲に焼いてしまうことができるのでしょう。〔三・二四〕

ああ、このお方の、無垢の黄金のように白く美しいそのお体が、火に包まれて、眼は小さく縮んで閉じ、焦げた木材のように穢い黒色になってしまうなんて。〔三・二五〕

火の中にいるこのお方の、パチパチという音を立てながら、真っ黒く焼け焦げてゆく、そのお体を、いったい誰がいま、見るに堪えられるでしょうか。〔三・二六〕

二つに割られる時の〔パチッと響く〕竹の節の音のような、この方の骨が〔割れて〕爆ぜる時の音を、親しい者たちはどうして聞けるでしょうか。〔三・二七〕

風にしがみつかれながら、細かく揺れる小枝がまるで〔差し伸ばした〕手のような、これらの樹々は、「どうかこの方を焼かないで」と、〔燃やそうとする〕火を引き止めるかのようです。〔三・二八〕

涙にかすんだ目で、哀れに落胆した友人たちの「あ、あ、‥」というたった一音だけ〔発する〕声は私たちの心を引き裂きます。〔三・二九〕

「ここで彼と対話をしたね、ここで彼は乞う人に布施を与えたね」と、この気高い方の親友たちは涙を浮かべて〔場所を〕指し示すことでしょう。〔三・三〇〕

近親でなくても、私たちの心は苦しみに焼かれます。〔まして〕この方の友人たちや親族は、どのようにして命を維持することができるでしょうか。〔三・三一〕

◇ そのため、難行をされるこの方の、この酷すぎる凄まじい行為を見ることにとても堪えられません。」――そう言って、それらの女たちは家に立ち去って行きました。

その後、菩薩は誓願を次の様に明らかにしました。

「私は善行によって獲得できるインドラの地位も、ヴィドヤーダラ（明呪を有して雪山に棲む半神的な種族）の王たることも、〔人の〕王たることも求めません。この善行（功徳）の発生により、仏位を達成して、これらの生類の苦しみを滅ぼすために、〔仏として〕私があることができますように。〔三・三二〕

◇ こう語ってから、かの偉大な方は自分〔の身体〕を投じました。するとたちまち、その〔坑の〕火は焔すべてが消え、あらゆる煙が止んだものとなり、〔それが変じて〕(a) 芳しい蓮華の湧出による香りによって周りの空間が薫らされている、(b) しかもその蓮の群の花びらの上にある清らかな水滴の粒がまるでエメラルドの石の上に水晶の粒々が撒かれているかのようである、(c) また蜜蜂の群やオシドリの番いやハンサ鳥や雁たちによって美しく飾られている、蓮池へと変わりました。

その、賢者たちの最勝なる者（菩薩）は、まるで〔仏になろうとする〕本望を達成したかのような蓮の有様と思わせる〔一本の〕蓮の上に、自分自身が坐っているのを見ました。〔三・三三〕

(a)酔った蜜蜂たちが足の近くを飛び回っており、(b)蓮の上に坐して、(c)〔感官が〕鎮まっており、(d)蓮華の花びらのような長広の目をもつ、ダルマカーマは、法を説きながら、まるでブラフマー神（蓮を胎として生まれた者）であるかのような、輝かしい美を完全にそなえ持っていました。〔三・三四〕

「これは夢だろうか、それとも、これは幻なのか。なんという違いだろう、あの火とこの蓮池とでは。」それらの人々は、驚きに襲われた心で、この奇跡を見ながら、このように言葉を語りました。〔三・三五〕

それらの人々が、気高い願望をいだいて蓮華の中に坐る彼を見つめているうちに、〔彼らが目に溜めていた〕悲しみの涙の滴りは、〔新たに〕湧き出てきた歓喜の涙によって、まるで激情をもってたちまち追い払われるかのようでした。〔三・三六〕

その時、蜜蜂たちの群を伴って、花糸（雄蕊）が〔放つ〕香りに満ちた花の雨が虚空から降りそそぎました。マーラ（魔、愛神）は、花の〔矢をつがえた〕弓を脇に下ろし、憂いの中にとどめ置かれ、頬杖をつきました。〔三・三七〕

◇その時、かの婆羅門は、口の内部を焼き焦がす熱い吐息を吐き、燃える木炭の中に立っているかのような自分自身をなんとか保ちながら、次の様に語りました。

「私は深い大地の割れ目より燃え上がって噴出する巨大な火をまるで目の前に見るかのようです。炎熱におびやかされて、あまりに苦しい私のこの肉体は、まるで大地に沈み込むかのようです。〔三・三八〕

ダルマカーマよ、今すぐここであなたは凄まじく恐ろしい火をもつ地獄に落ちようとする私を救う庇護の場（帰依処）に、どうかなってください。崇高な願望をもち、他者の益を行う、あなたのような偉大な人々は、友と敵とに等しい思いをもつのですから。」〔三・三九〕

◇すると菩薩は彼への憐れみから、真実の誓い（真実の力による加護）を行いました。

「私は〔あらゆる〕生類のために菩提行を行じます。この真実にかけて、婆羅門が燃える火の地獄に落ちることがありませんように。」〔三・四〇〕

◇　このように菩薩が語った時、たちまちその婆羅門は、自分に〔清涼をもたらす〕黄栴檀〔の香油〕が塗布されたかのように、悦びました。

生類を益することに熟練した「善き友」（善知識）と出会う時、悪人たちがもつ悪罪は、ただちに消滅するものです。〔三・四一〕

◇　菩薩は心悦ぶ親友・親族・愛する者たちに見つめられながら、布施・持戒などを励まし勧めるため、〔次の〕法話をしました。

「〔認識の〕二つの不確実な根拠である『聖教』と『推論』よりも、感覚的対象の確認から生じる『直接知覚』のほうが、より力があります。〔三・四二〕

燦めく焔をもつこの火は、まるで私の大捨施〔の行為〕をずっと眺めていて驚愕したかのように、人々の眼前で満開の蓮の群に変わりました。〔三・四三〕

ですから、すぐれた行いがもつその威力である、大きな驚異をよく見て、あなた方は「善行と不善行の結果が〔それぞれ〕幸せと不幸である」という、このことがらを熟慮して、悪い行路（悪い生き方）を捨てなさい。〔三・四四〕

怠惰なる無思慮さという眠りによって目を閉じたままの精神をもつ生類にとって、目覚めることが必要です。ただし、ぱっちりと知性の目が開いている賢者たちについては、すでに目覚めている以上、一体何に覚醒されうるでしょうか。〔三・四五〕

〔他者の〕幸せを願う者たちに対しても、聖仙たちは教法の声によって、はっきりと目覚めを起こさせてあ

げられます。進みつつある馬たちに、一打ちをもって促してやることで、〔彼らの〕進み方は特別なものとなります。〔三・四六〕

欺瞞的である家住期を守りつつある賢者は、〔それに〕信頼を少しも置くべきではありません。〔たとえば〕鉤棒で制御されない凶暴な酔象（発情した象）の上に乗っている者は、居眠りするべきではありません。〔三・四七〕

息子たちのおしゃべり、豪華な邸宅、嬌態と美に飾られた女たち、―執着心をいだく愚者たちが所有するこれらすべてのものは、寂静に〔赴くのに〕適した道を妨げるものです。〔三・四八〕

八難処（仏道修行が困難な八つの生存の世界）を避けて、なんとか、きわめて得がたいこの『人間たる生存』を得たのに、無思慮な怠惰を楽しみ、寂静（涅槃）へと急がないならば、その人は〔死後に〕牛たちのための軛の梶棒に繋がれるにふさわしい者になるでしょう。〔三・四九〕

『これは得た。これはまだ得なければならぬ。これはした。これはしなくてはならない。』―このように、人間たちの『心』という家を線描する、『願望』という筆は、途絶えることがありません。〔三・五〇〕

「〔これは〕快楽である」と思い、存在しないものへの妄想（虚妄分別）に従う人々は、まるで蛇たちに覆われている栴檀〔の木〕を抱きしめるように、結末において恐ろしいものである『感官の対象の享受』を抱きしめて、多くの『苦しみ』という網（捕獲の罠）の上に坐っています。〔三・五一〕

ああ、無明に覆われ、愛欲から生じたけがれに汚されている、すべての生類はなんと哀れなことでしょうか。すなわち『死』という敵の領土に近づき、「象の眠り」に陥ったかのように〔覚醒しがたい状態で〕いるのです。〔三・五二〕

『〔心を〕覆うもの』（五種の煩悩）という狡猾な敵たちによって、正しい進路を失なわされ、絶えることのない『無

常性』という危難を考えずに、『仏の教え』という船を拒絶し、生類は『災禍』という海に沈み溺れています。〔三・五三〕

〔小さな焔という〕消えつつある火がもつ姿のように、一瞬一瞬に命は消滅に近づいてゆきます。それ故、つねに思考を感官の対象（快楽）に向かわないようにさせながら、〔その思考を〕福利に向かって急き立てなさい。〔三・五四〕

以上、私によって語られたことが、もし理に適っていない言葉なのであれば、好むがままに欲望と快楽との連なりを楽しみなさい。しかし気高い方々は、もしこれを有用な〔言葉〕と考えるなら、感官の対象（快楽）への渇愛を止滅させる最高の寂静（涅槃）へと赴きなさい。」〔三・五五〕

◇　このように法の説示をなした後、菩薩は親友たちと一緒に住居に入りました。

――さあ、このように、『教えの詩』という宝石の鑑定に熟練したかの世尊（釈尊）は〔輪廻の中で繰り返し〕『教えの詩』を命という代価をもって買われたのです。そのことを思い、つねに苦の断滅を欲する賢者たる者は、法話を聴聞することに大いに熱心になるべきです。また「善き友」（善知識）に仕えることは、望む果実を産み出すものであると考えて、その彼に従う者としてありなさい。

『ダルマカーマ・ジャータカ』、第三話〔終わる〕。

第四話　兎ジャータカ

気高い者たちは、たとえ動物に生まれようと、他者を益するために命を捨てるのです。人間として生まれて、誰がいったい財産だけに執着してよいものでしょうか。〔四・一〕

◇　このように伝え聞いています。― (a) 身動きせずに静かに〔並んで〕とまっている鸚鵡の群に見える黄緑の草地に覆われている空地がある、(b) また種々の山の樹々の影には鹿たちの群が反芻をなしながら坐っている、(c) また飛び回る蜜蜂の群によって歌うかのような〔騒めきの〕音を立てられている花咲く蔓たちと接触したことにより、芳香をもつにいたった風によって震わされている滝の水に周囲を洗い清められた岩の板がある、(d) 聖者たちの心に適う〔清らかさをもつ〕、(e) また岸辺の樹々の蔓の若枝たちによって〔素早い走りが〕躓かされている小川の波によって打たれた睡蓮から〔生じる〕白い泡の冠によって美しく飾られた水があり、(f) また水棲の生き物や鳥たちが鳴き声を立てる蓮池がある、或る山の森の内部に、菩薩は兎として〔棲んで〕いました。

其処でその〔兎〕には (a)〔欲望の〕滅除を強めて感官をよく鎮め、(b) 性の快楽を享けることを嫌悪する心をもち、(c) ぼろ布・毛皮・パラーシャ樹の杖・水瓶のみを所有し、(d) 激しい苦行をしている、一人の苦行者が、共に暮らすことの美徳によって友情を育んできた仲間として、おりました。

ともに寂静を得て、同じ法（同じ性質）をもち、苦と楽の生起を平等とみなしている、心からの親友である二人は、互いを見ない時は、心が楽しみませんでした。〔四・二〕

月は〔月齢の〕若い時は一定の期間、兎〔の姿〕を欠いていますが、しかしその行者は決して兎の姿をもつ親友を欠くことがありませんでした。〔四・三〕

真の友情は、本性において清らかな心をもつ善人たちがもつものです。まして、お互いの徳性を語りあって信頼でしっかり結ばれた心の状態をもつ者たちの場合はいうまでもありません。〔四・四〕

寂静を楽しむ人間たちは、法の〔追求の〕ために知性の鋭さをもっています。しかし〔通常〕わずかの知性をもつ動物たちに、どうして法を求めようとする考えがありえましょう。〔四・五〕

「ああ何と大いなるかな、その隔たり、― その兎という生まれと、〔彼の〕その勝れた言語の巧みさと、そ

の心の寂静とは！」――そう考え、神々の心も、兎〔である菩薩〕に対して驚嘆に満たされたかのようでした。〔四・六〕

◇　さて、(a)恨みがましく農民たちに眺められていて、水がないために真っ白であり、蔓に似た稲妻の美がもはや起こらない、風の力でばらばらに塊が千切れてしまっている雲があり、(b)また太陽の光線たちによって残っていた水も吸われてしまい、萎れて穂が軽いままの稲に覆われている稲田があり、(c)また急に豊かな水流が断たれてしまい、わずかの水も失って広大な砂の岸辺の上にとり残されている、口をぱっくり開いて上を向いた二枚貝の、貝殻ばかりの川があり、(d)また〔或る場所には〕かなりの暑さによる疲労によって息が詰まらせられたために頸を振り動かしている、求愛の時期（繁殖期）にもかかわらずもはや舞踏するという活動を止めてしまった孔雀たちがいる、(e)また低くしか伸びずに干涸らびてしまっている若草の芽葉のある地において、草という食物を得られないのでひどく痩せた腹をもち、緩慢に歩くたびに揺れている弛んだ喉袋をもち、乳が涸れているため軽い乳房をもっていて、〔乳が飲めないので〕ひどく衰弱した仔牛をつれた、若い雌牛たちがいる、(f)また野菜をほとんど無栄養の食物として食べているために痩せてごつごつした四肢をもつ貧しい人々が〔住んでいる、(g)あちらこちらで乳棒の〔搗かれる〕音が牛舎から聞こえてくる、〔そのような〕村々が、飢饉という悪害のために客人へのもてなしを避けている時、かの苦行者はその兎に言いました。――「ああ、本性が軽薄である人々は、困窮時には、約束した供養すら実行しなくなるものだ。あなたは次のことを見てとるべきです。

以前は、激しい驟雨によって宝石のような月輪の模様がばらばらに乱れた尾の飾り羽を嬉しげに拡げて、踊り手のように舞踏をみせて、鳴き声によって雨雲を讃えるかのようであった孔雀は、〔今や〕水気のない雲に視線を向けることを滅多にしなくなりました。人々も大半は、自分の利だけに敏くなり、富み栄える者のみに仕えるようになりました。〔四・七〕

水気のない雲たちは散り散りになり、虹（インドラの弓）は断たれました。孔雀たちの、山の洞窟に木霊して長く引いた鳴き声は、もう聞こえることがありません。まるで「あらゆるものは生来の性質により〔たちまち〕滅びゆくものだ」と、『稲妻』という踊り子が悲しく考えたかのように、〔彼女は雷光の閃きという〕婀娜なしぐさが甘美である舞踏をもう久しくやめてしまっています。〔四・八〕

果樹の林では果実が滅びてしまいました。草木は皆ひからびました。蓮根も、蓮池の泥が堅くなったため、次第に萎んでしまいました。また私のこの草葺きの庵にはナツメやモモタマナの実のごくわずかな貯蔵もありましたが、それさえも尽きてしまって、大変な難行である苦行をなすにも、〔これから〕私はどのように暮らしてゆけるでしょうか。〔四・九〕

もし食物がなければ、この体はたえず疲労するようになるでしょう。ヨーガ行者の心がもし疲労に妨げられたなら、瞑想の堅固さがどうしてありえましょうか。もし心が瞑想〔の堅固さ〕を失うなら、智者であっても、真実をまのあたりに見ることがどうしてありえるでしょう。真実が見えないことの結果として『暗愚』という闇を〔行者が〕もつ時、〔修行は〕終に空しい徒労があるのみでしょう。〔四・一〇〕

それ故、私は〔いったん〕羚羊の皮・水瓶・樹皮の衣を捨てて、親族の人々と一緒に〔故郷の〕自分の家に滞在することにします。飢饉の害悪が消え失せた時、私は、愛しき者よ、あなたと共に久しく、この森の奥に再び住むでしょう。」〔四・一一〕

◇ すると菩薩（兎）は、長く一緒に暮らしたことで大きくなった愛情の故に暖かく濡れた心で、かの仙人に言いました。

「象は楽になりたいと願って、繋ぎ止める杭棒を引っこ抜き、なんとか森の奥に逃げ去ってゆきますが、しかしその後愚かにも鉤棒で打たれた苦しみを忘れてしまい、〔森から〕人間たちのもとに戻りたいと願うも

のです。〔四・一二〕

心の寂静でも、賢者たること〔の智慧〕でも、苦行による多くの徳性でも、知識の道を辿りゆく学問〔の深さ〕でも、あなたは他の聖者たちを凌駕しています。太陽が光線によって遥かに〔他の〕灯りを〔凌駕する〕ように。〔四・一三〕

あなたは何ら昏さのない、明白に見る〔知性の〕目によって、諸々の論書における確実な真理をつぶさに見ているのにもかかわらず、そのように『感官の対象』という敵の領土に入ろうと欲するとは、まるで軽率な振舞ですが、どうしてそんな振舞を見せるのですか。〔四・一四〕

生まれつきの盲人が明浄なる満月の円盤を知らないように、愚かな人は、(a) 闇を打ち破り、(b) 道を照らし、(c) 人々に心の明浄を生じさせる、賢者たちがもつ『教えの詩』〔善説〕を知りません。〔四・一五〕

ランプとしての『自分の理性』なくして、夜〔の暗闇〕としての『安楽への愛著』を撃退すること〔がありえないこと〕は言うまでもありません。心清らかな生類が家庭生活〔家住〕という生き方を楽しむことは、大きな過ちなのです。〔四・一六〕

(a) 朝と夕べに〔火の神に捧げる〕澄んだ牛酪の供物の香りが薫り、(b) ナツメやモモタマナの実は室内に置かれており、(c) 〔屋外には〕池に憩うシャラーリ鳥やサーラサ鳥がいて、(d) 樹々に囲まれている、(e) 〔苦行者たちの〕草葺きの庵によって美しく飾られた〔この地〕、――〔四・一七〕

(f) 幼い木が芽を出すと苦行者の娘たちが汲み上げてきた甕の水を散水する、(g) また小川は岸辺の樹々の影に覆われ、(h) また開き始めている花々の好い香がする風が〔吹いている〕、――〔四・一八〕

(i) また気ままにぶらぶら歩き回る苦行者の息子たちが後をついてゆく鹿たちによって噛み切られたヴィーラナ草の芽葉があちこちにある、(j) また〔聖典の〕誦唱につれてゆらゆら揺れる髭に覆われた頸をした苦

行者たちが住んでいる、―〔四・一九〕

(k) 山麓にある、この地は、ああ、かたく〔男女の〕愛情に縛られた心をもち、悪しき快楽のごくわずかな味わいに執着している、強欲な愚者たちの精神を、もちろん魅することはありません。〔四・二〇〕

愚人は迷妄のあまり、『愛情』という罠からのがれることをせずに、不善の人々が常にたどる悪い道に入り込むを得、〔そこで〕絶えず転びつまずいています。〔あなたは〕有徳な者たちが進む、塵埃の無い〔正しい〕道の上にすでにせっかくありながら、〔その道〕に留まらないとは、それはこの場合、ありえないことです。〔四・二一〕

◇ じつに家庭生活（家住）は沢山の『災禍』という悪害をもつ、と理解しながら、どうしてこの、心の寂静に適していて解脱の道を明らかにする出家の生活を捨てて、わずかな快楽のために大変な危険がある『苦』の蛇地獄に入ろうとあなたは望むのですか。あなたは「再び私は苦行林に戻ってくる」とおっしゃいますが、そのことは信じられません。なぜかというと、家に住むなら、沢山の妨害があるからです。

感官の対象（快楽）に征服された者が、微笑という婀娜なる美を飾りとする若い女たちを見るなら、愛欲をもつ者の心は、あらゆる成果がある苦行林にいったい執着するでしょうか。〔四・二二〕

◇ また、大仙人様、感官の対象（快楽）を追い求める生き物たちは大きな災禍を経験します。〔次の点を〕考慮すべきです。

獣たちは猟師の歌声によって、弓の射程内へと誘われます。感官の対象を味わうことに貪欲な者たちには、〔終に〕破滅のみがあります。〔四・二三〕

火に落ちた蛾は、激しい燃焼の苦しみを味わって死にいたります。また〔同様に〕、愛すべき色かたちに心を奪われた人々に、どうして災禍が起こらないことがあるでしょうか。〔四・二四〕

もし釣り針にある餌を魚が食べなかったら、誰がその魚を水から釣り上げることが出来ましょうか。快楽を

強く欲する思いがある愚かな人々は、目の前にぶらさがっている危険をしっかり見ようとしません。〔四・二五〕

〔花の〕強い香りを強く欲するあまり、今や閉じつつある睡蓮の中に留まった蜜蜂は、〔閉じ込められて〕苦難を味わうに至ります。雌象を追いかけて森から出てしまった象は、〔人に捕獲されて〕鋭い鉤棒で打たれる苦しみを耐え忍ぶことになります。〔四・二六〕

弱い知性が〔欲望に〕惑わされることが、様々な災いの原因です。強い知性をもつ偉大な人々は〔それを〕避けます。もしあなたが永続する安楽を願うのでしたら、それ故、〔蛇の〕毒〔を避ける時〕のように、『感官の対象（快楽）の領域』という蛇の居場所をお捨てなさい。〔四・二七〕

◇　仙人は言いました。「それは真実です。侮蔑などの沢山の『悪徳』という矢がねらう標的が、『家庭生活』（家住）です。わずかな快楽の味わいに心が惑溺した者たちは〔それを〕捨てることが出来ません。しかし、わが最高の友、兎よ、道徳心と名声の大海であるあなたは実にこれほどに〔立派な〕諸々の徳性をもっておられ、それらに私の心は魅了されていますし、また寂静（涅槃）を願っていますので、私は再びここに戻ってきます。」〔四・二八〕

◇　菩薩（兎）は語りました。「もしどうしても〔この地を〕立ち去ることを願うのでしたら、どうかこの一日をここで過ごし、翌日に自らのご意志にお随いください。」

するとその聖者はこう考えました。「この方はきっと私を〔食事に〕招待したいのであろう。この方はどこかで果実が美味しいジャンブ樹の林を、それともここらで実をつけたマンゴーの樹を、あるいはどこかの岩の隙間において熟して赤く柔らかくなった果実が薫るイチジクの樹を見つけたのであろうか。」〔四・二九〕

◇　さて兎はその夜を過ごし、夜が明けるとその森じゅうすべてを探しまわりましたが、〔食用の〕根も果実も

見つけられなかったため、〔次の様に〕考えました。

「よき親友である、心静かで、安楽と苦しい事を等しいとみなす聖者が衰弱した体で、お腹を空かし、何一つ食べていないのに、どうして私ばかりが森の奥で緑の草を食べ、冷たくて清らかな水を飲んでいることができるだろう。〔四・三〇〕

◇　いや、まてよ。食を必要とする者たちの願いを叶えるのに適したこの身体がせっかくありながら、どうして私は何一つ出来ないかのように、落胆した心でいるのか。」

そこでかの聖者のもとに行き、〔兎は〕言いました。「大仙人様、いま少しの間お待ち下さい。何か食べ物の類をお持ちします。」

すると聖者は考えました。「この森では球根・塊茎・果実が完全に尽きているのに、それにもかかわらず食物を持ってくるような、いかなる能力が彼にあったのだろうか。」

さてその時、かの偉大な心の者（兎）は、燃え上がる石炭の山を見つめながら、誓願を次のように大きく高めました。

「食を必要とする者の餓えを鎮めるため、私は恐れなく、揺れる炎をもつ火の中に命を捨てましょう。そのことによって、生類の不幸を消滅させる、極めて達成困難な、『十力をそなえた者』（仏）たることを〔未来世に〕得ることができますように。」〔四・三一〕

あらゆる生き物の友である彼は、煩悩を滅するため寂静の境地を欲しながら〔火中に投身し〕、歓喜の心をもって「私は他者の益のために自分の身を捨てたのだ」と思った瞬間、彼がもつ福徳の威力によって、〔忽然と〕森の中のその火はすべての炎を鎮めて消え、とびまわる蜜蜂の群がいる、揺れる水波の線をもつ蓮池に変わりました。〔四・三二〕

◇　その時、かの聖者は「ああ何ということ！」と呻きつつ、火を消すために水瓶をつかみ、急いで近づいてみると、かの偉大な心の人（兎）が法を説きながら花開いた白蓮のなかにいるのを見ました。

かの兎によって超自然力の働き（加持）を受けたその白蓮は、水の上で激しくまばゆく輝きました。まるで秋の晴れ渡った虚空に、光明の特相をもつ浄らかな月の円盤が〔激しくまばゆく輝く〕ように。〔四・三三〕

◇　かの聖者はその白蓮の上にいる兎を見、驚嘆した心で、このような讃歎の言葉を発しました。

ああ、名声の海であるあなたの、他者の益をみごとに達成しうる、この行為は驚異です。あなたは、想像を超えた特別な偉大さに位置する者であり、何者であろうと偉大な知性の持ち主なのですが、兎の外見をもって振舞っています。〔四・三四〕

ああ何という相違でしょう、〔先ほどの〕燃え盛る火と、いま此処にあるこのような〔清涼な〕青蓮の群とは！偉大な心の者たちがもつ福徳の力によって加持されるなら、毒の木すらも薬用植物の木に変わることでしょう。」〔四・三五〕

◇　その後、かの偉大な心の者はその白蓮から降り立つと、かの聖者と共に草葺きの庵に入りました。

菩薩がなした出来事を知って驚愕した心をもつインドラ神により〔21〕、アンジャナ山（神話の山）のように青黒い雲海のなかに太陽が隠れ、稲妻に照らされた赤黄色の空間へと、空いちめんが変わりました。

それから震動する水のしぶきをともなった風が、夾竹桃を破壊しつつ、至るところに吹きました。鸚鵡たちが逃げ込んだ丘のマンゴーの樹々は、ぎっしり並んでいる果実のゆえに〔稲妻の中で金色に〕輝きました。〔四・三六〕

蜜蜂たちによる竹管楽器のような音、また〔急増した〕水の滝による太鼓のような音が起こった時、孔雀という踊り手は、山の丘の上にある新しい雨雲を浮かべた空をみつめて踊りました。〔四・三七〕

〔空にかかった〕美しい「インドラの弓」〔虹〕が引かれると、広く沢山の『雨滴』という矢が射放たれて落下し、『稲妻』という刀たちがぴかりと輝き、〔軍隊としての〕雲が、敵である『暑さ』を滅ぼしながら、広がり展開しました。〔四·三八〕

まわりを飛び回る蜜蜂たちの来襲に怒りながら、新芽を出しつつある若いケータカ樹〔阿檀・蛸の木〕の上に身をあずけている、鉄製の腕輪のような体をもつ蛇は、シューと〔威嚇〕音を発しながら、幾度も〔頸部の〕頭巾を拡げました。〔四·三九〕

愛する妻との別離を悲しみながら恋しく思う旅人たちは、山道の木の下で雨宿りしながら、驟雨の間を飛び回っているチャータカ鳥たちの囀りに、ひたすら聞き入っていました。〔四·四〇〕

〔家では〕旅人の妻たちが震える目で、雨雲のなかで激しくひらめく稲妻を見ましたが、〔その様は〕まるで象の上で風に吹き流される旗竿に取り付けられたサフラン色の旗〔が激しくひらめくか〕のようでした。〔四·四一〕

孔雀たちの〔抜け落ちた〕尾羽の月輪と混じりあってカーシャ草や竹が〔浮いて〕いる濁った川の水は、ある場所では渦によって芭蕉の花がくるくる回っており、また〔ある場所では〕岸辺のジャンブ樹の果実が〔水面に〕落ちて、泡の分断がありました。〔四·四二〕

ジャンブ樹の〔落ちた〕果実によってまだらの有様になっている川岸を、また、柔らかな草地が気持ちのよい美しさである土地を眺めながら、かの聖者は、雨水のしずくが打つので〔パラパラと〕微かな音を響かせている草葺きの庵のなかで、兎と一緒に居て、心悦びました。〔四·四三〕

そして彼（兎）に尋ねました。「一体あなたは、この甚だ偉大な勤苦の行為によって、天界での幸せを希求する者として、インドラ（神々の王）の地位を獲ることを願っているのですか。」〔四·四四〕

決意の固い心をもつ兎はその苦行者に答えました。「生き物たちの苦の消滅のため、私は仏になることを願うのです。」〔四・四五〕

その聖者は彼に言いました。「もしあなたが仏になりましたら、どうか私はあなたの弟子になれますように。」すると彼はその〔聖者〕に、同意する返事をしました。〔四・四六〕

◇ ― さあ、このように、動物であっても、かの世尊（釈尊）は菩薩行を行じながら、命をもって他者を饒益されたのです。そのことを考え、〔あなた方は〕浄信に満ちた心をもって仏・世尊を想うべきです。

『兎ジャータカ』、第四話〔終わる〕。

第五話　月光王ジャータカ

菩薩が〔自らの〕頭を布施した行為に驚嘆しない人はいませんが、しかし概して、偉大な人々の企てる行為は、その結果に見合うものなのです。〔五・二〕

◇ このように伝え聞いています。― (a) 風の力によって波立つ〔白い乳の〕大きな波がある『乳海』（神話上の海）に〔様子が〕似た、〔白い山々が連なる〕ヒマーラヤという真珠のネックレスによって、〔その胸が〕飾られている『北の空の空間』という美女のため、上機嫌のヴィシュヴァカルマン神（造物神）によって〔その頬に〕ラインが描かれた葉の装飾文様（顔に線を描く化粧の一種）のような〔形に見える〕[22]、(b) またあらゆる種類の人々によって混み合い、(c) 風によって揺らされた林苑の花々の香によって諸方の空間が薫じられている、(d) また常に豊作であるために充ち満ちた蔵や穀物倉があり、(e) まるで都城という姿をとった繁栄の女神（シュリー）であるかのように〔繁栄する〕、バドラシラーという名の王都がありました。その〔王都〕は今日タクシャシラーという

名で呼ばれています。

その〔王都〕には、(a) 政略と武力で他の王や近隣の属国の王を打ち負かし、(b) 海が諸川を集めるように、すべての富と栄光を一身に集めた、(c) またあらゆる学問の知を修める器量をもち、(d) あらゆる生類に憐愍をもち、(e) その浄らかな顔は〔本物の〕月の輝きを恥じ入らせる美の光輝をもつ、月光（チャンドラプラバ）という名の王がいました。

(a) 敵の都城にいる蓮の花のような女たちの美を凌駕し、(b)〔月光を受けて花開く〕夜の白睡蓮のようである友人たちに歓びを生じさせる、月のようなその王のもつ身体の光輝は、夜において黒闇の網を滅ぼし、灯明の働きをしました。〔五·二〕

◇ この王の、世俗を超越した次の宣言は、あらゆる人々を驚かせました。

「乞いに来た或る人がもし私に両目、あるいは生命の基である頭を求めるならば、〔輪廻的〕生存を滅ぼす境地に進むことを欲する〔私〕は、その人の請願を断ることをしない。」〔五·三〕

◇ さて (a)〔いつも〕暁が千の光線をもつ太陽を先導するように、つねに菩薩（月光王）を先導していて、(b) 大臣たちの長であり、(c) 大賢者たる、マハーチャンドラ（大月）という名の大臣がいました。

〔王と宰相の〕彼ら二人は、互いに〔相手の〕徳性を語り合い、互いに〔相手を〕益することに心がけて、決して互いから離れることがありませんでした。〔五·四〕

◇ ある時夜中に眠り込んだマハーチャンドラは、夢の中で、(a) 皮膚は焼けた葉の堆積のように黒く荒くざらざらして、(b) 髪と髭は火焔の束のような赤褐色で、(c) 手の爪はライオンの鉤爪のように曲がって鋭く、(d) 水分で膨れた重たい雨雲のような巨大な太鼓腹をして、(e) 腕と腿は鉄柱のように太くて大きく、(f) 口の両端は三日月のように曲がった牙によって切り開らかれていて、(g) 両眉は閃く稲妻のように斜めに吊り上がり、

(h) 血染めの人間の皮で腰を覆っている、悪鬼どもによって、髻の宝珠が抜け落ちたかの〔月光〕王の頭が運び去られてゆくのを、見ました。

目覚めて、気が動顛した彼は、次のように思いました。「ああ、ひどい結果を〔暗示する〕夢を私は見た。私たちの主は、『私は乞われれば、この身体であっても請願する者に与えるであろう』と約束されたが、そこで私は、かの王の頭をまだ誰も求めに来ないうちに、宝石で出来た沢山の〔王の〕頭を工芸職人たちに作らせておこう。頭を乞い求める或る者がもし来れば、それらをもって〔都城の門の〕外で敬意を示して供養し、立ち去ってもらおう。

どうか、感官を守り心をよく修めた王様が、この大地を守護されつつ、長生きされて、あらゆる人々の命を見守られますように！」〔五・五〕

◇ そして大臣たちの長であるマハーチャンドラは、宝石で出来た頭をいくつも作らせてから、〔都城の門の〕外で、「何の用か」と、乞いに来る人々を取り調べさせました。

さてガンダマーダナ山に、(a) 猿の特徴をもつ顔をして、(b) まるで熟した椰子の実の皮のように、剛くてまばらな毛髪と髭が生え、(c) 顔をしかめていないのに眉を吊り上げたしかめ面で、(d) 皮膚は焼けた切り株のように黒く荒くざらざらして、(e) 脹ら脛と太股と腕には身をもたげた蛭たちのように曲がりくねった太い血管の網がでこぼこに出ている、(f) 蛇のように本性が暴悪な、ラウドラークシャという婆羅門が住んでいました。

彼は考えました。「月光王は、一切を与える者だという。それでは私が行って、頭を乞い求めることによって、その王を、約束を違えた者にしてやろう。そもそも頭を布施するなんて、誰が出来るか。」――そう考えて、バドラシラーに次第にやって来ました。

〔その時〕大地は山とともに震動し、海を幾度も揺さぶって渦巻かせました。川の水は激しく波立って濁り、

水中は絶えず動き回るナマズたちによってかき乱されました。〔五・六〕

月と太陽は輝かず、まるで鏡が塵にまみれて灰色になったような有様でした。空の諸方の空間はそこらじゅうがくすんでいて、まるで夫が長旅に出た〔留守居の〕女たちの〔色がさえない姿の〕ようでした。〔五・七〕

その季節ではないのに、樹々に白い花弁と花糸をもつ花が咲きました。塵埃の溜まりを巻き上げて吹く風は、微細な火をわずかに含んでいるかのようでした。〔五・八〕

動・不動の〔あらゆる種類の〕生き物がいる大地は、〔その時〕汚れた痩せこけた生き物の群であふれました。また月が西に没する〔夜明けの〕時のように、夜はすすけた色の星々をもちました。〔五・九〕

森で柔らかい草を食べているのに、雌牛たちの乳はたちまち尽きて出なくなりました。祭祀者たちによる諸々の祭儀では、〔炉に〕投入された火が、うちわで扇いでも燃え立ちませんでした。〔五・一〇〕

◇〔前兆としてこのような〕種々の起こるべきでないこと〔が起こるの〕を見て、バドラシラーの住民たちは「これは何だろう」と不安がって、騒然となりました。しかし最も鋭敏な者たちは、王に破滅が迫っていることを予見して、動揺した心で、互いに次のように語り合いました。

「不吉の前兆を生じさせる〔その〕災いが、かの王に起こることがあってはいけません。彼の腕の中で、その力に寄り添って、人民は幸せに眠っているのですから。」〔五・一一〕

◇　その時、都城〔を守る〕精霊が、目に涙を浮かべて、大臣マハーチャンドラに知らせました。「ラウドラークシャという名の、この婆羅門が、あの王の頭を乞うために〔この都城に〕来ました。何らかの手段で、これをくい止めなさい。」

そこで大臣はあの宝石で出来た頭をいくつか持って行き、ラウドラークシャに言いました。「偉大な婆羅門よ、私があなたに差し上げるところのものによって、用は足りるはずです。どうして本物の王があなたに必要でしょ

うか。

もし僅かの財をもつ人から〔すでに〕欲しいものを得たなら、どうして、大きな財をもつ人〔に会うことが更に〕が必要でしょうか。象の足跡に溜まった水だけですでに渇きが癒されたなら、どうして〔更に〕海が必要でしょうか。」〔五・一二〕

◇　婆羅門は答えました。

「私が求めるのは、太い乳房をもった、白い雲のような姿の、仔牛を連れた雌牛たちではない。また、すこし耳を振ってあたりを飛び回る蜂の群を追い払う、盛り狂った象王でもない。澄んで燦然たる光線を放つ宝石がある装飾品でもないし、特別な衣服でもない。かの王の頭を私は乞うのだ、その者は一切を与える者だそうだから。」〔五・一三〕

◇　大臣は言いました。

「聖者よ、熱い帰依の心に満ちて、私はあなたに宝石で出来たこれらの頭を差し上げます。しかしもしこれらがあなたの求めているものでないのでしたら、さあ今、私の頭を受け取りなさい。〔五・一四〕

堅い決意で、家臣は主人のために〔己が〕命を養っているのですから、もしあの方（王）のために役立つ手段となることが出来るならば、本望なのです。」〔五・一五〕

◇　婆羅門は言いました。「これ以上の無駄話は沢山だ。呪法を行うために王の頭が私に必要なのだ。」

すると月光王は天眼（千里眼）によって、頭を乞い求めるその者が〔都城の門の〕外にいるのを見て、親友のように出迎えてから、かの宰相に言いました。「乞いに来た者の請願を、邪魔するのはやめなさい。乞いに来る者たちは、菩薩たちにとって、輪廻の海を越え行くための橋なのです。

対岸がはるか彼方にあって、渡るのが困難な海を、どうしても越えたいと願っている人の、組まれた筏をも

し破壊する者であれば、彼はどうして親友といえるでしょう。〔五・一六〕

ですから、法（真理）の〔道行きの〕仲間である人は、法を求めて行く者に対して、激励こそすべきであって、法の妨げをすべきではありません。〔五・一七〕

このように乞いに来る人が、解脱の原因として存在しなければ、菩薩にとって布施の波羅蜜を完成させることがどうして出来るでしょうか。」〔五・一八〕

こう述べて、王は剣を抜いて婆羅門に与え、恐れなく、「婆羅門よ、私の頭を切りなさい」と言いました。〔五・一九〕

その婆羅門の胸の上で、〔彼が着けている〕聖紐は、まるで恥じて、次のように長い間考え込んでいるように見えました。「なんという距たりであろうか、〔この者が〕婆羅門であることと、心に憐れみが欠けていることは！このことで、私はまるで不可触民（チャンダーラ）とつきあっているかのように思える」と。〔五・二〇〕

◇　その婆羅門は命じました。「あなたが大臣や親友や親族の人々に取り囲まれていては、あなたの頭を切ることが出来ない。あなたは独りになりなさい。」

そこでかの王は、呪詛の言葉を〔脅しに〕用いて、目に涙を溢れさせているその多くの人々を引き下がらせ、剣を手にしているその婆羅門を連れて、ラトナガルバ（宝蔵）という名の林苑に来ました。

〔その頃〕大臣ラトナチャンドラは悲歎のあまり、苦悩の言葉を発しました。

「ああ、頭が切り離された王を見ることに、誰がいま堪えられようか。魔物どもに襲撃されて、祭主による手厚い供養が台無しにされた供犠祭のように〔無残だ〕。〔五・二一〕

今日、王を失い、深く悲歎する人々〔に満ちた〕この都城は、もう美しく輝くことはない。まるで象たちによって満開の青蓮華が〔全部〕引き抜かれてしまって、あたりを〔絶望して〕飛び回る蜜蜂の群に満ちた、〔蓮

池の」水面のように。〔五・二二〕

だからあの王の死〔の報せ〕を聞く前に、私は今、先に、この命を捨てることにしよう。」そのように考えて、かの賢者（大臣）は、三昧の力により、自分の肉体を捨て去り、独存者（梵天）の境涯へと去りました。〔五・二三〕

この〔大臣〕は幸せな人間でありましょう。〔その生涯に〕幸福を得て、人々に月の光のように白浄である〔有徳の〕行為を示した後、〔王の死という〕親友たちにとっての大きな不幸〔が訪れるの〕を見て、真っ先に死を得たのですから。〔五・二四〕

◇　さてラトナガルバの歓喜林に王が入ると、後宮において〔女たちの〕大きな悲歎の声が上がりました。その園林にその婆羅門は入ると、かの王に言いました。「このようにあなたが〔普段と変わらない〕安楽な様子のままでいるのでは、頸に刀を下ろすことが出来ない。」

王は言いました。「それでは、婆羅門よ、いつも花を咲かせているこのチャンパカ樹に、私を縛りつけなさい。」その婆羅門はその通りにしました。すると園林の精霊たちが〔現れて〕、野蛮な暴力行為をする彼に、次の様に言いました。

「あらゆる人に親切である、何ら罪のないこの王の頸の上に、そなたはどうして鋭い剣を落とそうとするのか。〔五・二五〕

理由のない残酷さをもつ荒々しい心のそなたが、王の頭をもし切るならば、私たちはひらめく閃光を発する稲妻により、そなたの頭を砕いてやろう。」〔五・二六〕

◇　するとかの王はそれらの歓喜林の精霊たちを、丁重に次の言葉で制止しました。「無上正等覚をめざして進もうとする私に、あなた方は大きな妨害をなさってはなりません。随喜（他人が善行をするのを見て喜ぶこと）の行

動を取れば、功徳の獲得がありますが、さもなければ、善の立場を失うことになります。

乞い求める請願者たちに〔これまで輪廻の中で〕私が与えた頭は、今日、この頭〔の布施〕をもって、千〔の数〕を満たします。」〔五・二七〕

◇　菩薩のこの言葉を聞いて、それらの精霊たちはその場から引き下がって行きました。その時、かの王は次の誓願をしました。

「〔これから〕長い間あらゆる人を驚愕させるであろう、私によるこの頭の布施によって〔生じる〕善根の、その力によって、悟りが達成され、そして〔仏としての〕寂滅（入滅）の時には、私の遺骨は胡麻粒のように微細となって、ありますように。〔五・二八〕

このバドラシラーという名の都城において、私が〔これまで〕沢山の頭を布施してきた〔地点である〕この美しい場所に、人々の益のために〔将来〕大きな塔が起こりますように(23)。」〔五・二九〕

憐れみのゆえに〔生類に〕やさしい心をもつ王が、このように誓願をなし終わった時、その蓮のような頭を、無慈悲なその〔婆羅門〕は、まるで一本の蓮華であるかのように、蛇のような燦めきをもつ剣でたちまち切り落としました。〔五・三〇〕

かの王の頭があっという間に切断された時、開いた花々をまるで垂れ落ちる涙の雫のようにつけた、若い女の〔ように見える〕蔓の木たちは、風に動かされた若枝〔としての〕自分の両手をもって、まるで悲しみのあまりに自分自身を叩いて〔慟哭して〕いるかのように見えたのでした。〔五・三一〕

その林苑にある、睡蓮たちの一群れは、まるで風によって吹きちぎられた泡という腕輪と、風によって揺り動かされた波という腕と、震える蓮という顔をもつ、悲嘆する女たちの群のように〔見え〕、虫たちの鳴き声によって泣き悲しむ〔声を発している〕かのようでした。〔五・三二〕(24)

王が亡くなった後、栄光の美を喪失した沢山の人々で満ちている王都は、輝きませんでした（暗くくすんで見えました）。まるで無声で不動のまま〔立つ〕アオサギやチャクラヴァーカ鳥がいる、太陽が沈んでしまった後の蓮池のように。〔五・三三〕

梵〔天〕となる領域（梵天界）に王が去った時、海の岸辺は震え、〔波の〕轟きという悲歎の声を発しました。大地は、金に輝くメール山と銀に輝くカイラーサ山という高い二本の腕を〔頭上に〕挙げたまま、遠方まで泣き叫ぶかのようでした。〔五・三四〕

◇　かの婆羅門はその〔王の〕髪の所を掴んで、頭をぶら下げて持ち、その林苑から立ち去ろうとしました。するとバドラシラーの住民たちは悲しみのあまり、このように言いました。

「獅子座に坐している時、高まった歓喜をいだく家臣たちによって仰ぎ見られた、あの王様の頭が、萎れた睡蓮のような有様で、婆羅門によって髪の所を掴まれて、運ばれてゆくなんて。」〔五・三五〕

◇　また彼らはこう言いました。

「東の山の上にいる月の〔発する〕最も強い光の〔ような〕輝きをもって、象王の肩の上に坐り、〔他の〕王たちから敬意をこめて仰ぎ見られていたのに、あの王様が、〔今や〕頸を切られて流れ出した粘りけのある血で染まった胸をもち、〔上を〕旋回する鷲たちから見下ろされ、眺められているなんて。」〔五・三六〕

憂いに沈む大臣たちは、泣きながら、樟脳・栴檀・乳香を混ぜた巨大な薪の山を作り、その上に王を置き、真言〔の誦唱〕を伴って、火神への供物が投じられた火を、団扇の風によって強く燃え立たせました。〔五・三七〕

◇　激しく燃え上がるその薪の山を見つめながら、嘆き悲しむ人々は次の様に言いました。「ああ、何人も免れることが出来ない、聖なる『無常性』よ。

(a) かつて月の美しさを凌駕し、(b) 牛黄を持った若い女たちの若枝のような指に触れられ、ゆっくり〔肌に〕塗香されていた、王様のそのお体は、〔今や〕降ろされたインドラ神のふきながし〔幢〕のように静かに横たわって、揺れ動く火の焔という〔触れる〕指によってなでられています。」〔五・三八〕

◇ ― さあ、このように、菩薩であった世尊が、〔月光王として〕動じない心で頭の喜捨をなされたということをよく考えて、悟りを願っている他の人も、喜捨に完全に専念した心をもった、聖い人になりなさい〔25〕。

『月光〔王〕ジャータカ』という第五話〔終わる〕。

【注】

（1）蔵訳が伝えるこの作品の梵語名称は **Haribhaṭṭa-nāma-Jātakamālā** であるが、しかし正式名称はむしろ ***Haribhaṭṭakṛtā Jātakamālā**『ハリバッタ作のジャータカマーラー』と推測される。**Hahn (2011), p. 2** を参照。ただし『ハリバッタ作の…』では作品の固有名として使いづらいので、和訳する時は、『ハリバッタ・ジャータカマーラー』という名称を作品名として用いたい。英訳では作品名を **Haribhaṭṭa's Jātakamālā** とする。

（2）『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の成立年代については、**Hahn (1981)** を参照。ただしこの作品の成立年代の下限は、現在再び議論されるべき時期に来ていると私は思う。

（3）本作品のドイツ語訳として、**Hahn & Lohöfer (2016)** が昨年に出版された。この訳本は計一九の章からなり、原文の韻文の箇所はドイツ語でも韻文の形で訳している自由訳である。また英訳として今年の秋に **Khoroche (2017)** が出版されたが、私は本論文の和訳を脱稿する直前にこの英訳本を入手し、参照することが出来た。**Khoroche** のこの英訳は計二四の章からなる学術訳である。この英訳では **Hahn (2011)** の校訂梵文の合計一七の章に対する飜訳に留まらず、今後校訂梵文が発表される予定のいくつかの他の章からの飜訳も加えているため、全部で二四章から成るものになっている。また本作品の三四章の後に付随するシャーキャシンハ・ジャータカは外薗幸一（一九九三）による和訳がある。

（4）各章の並行話の情報・比較調査としては、第一～第五話の各章については **Straube (2009), S. 304-345** を、また第二、第四、第五話については **Handurukande (1972)** の論文を参照のこと。

（5）本論文の飜訳において依用したハーン校訂の梵文テクストは、Hahn (2007) と Hahn (2011) である。また第一話については、Hahn (2006) も参照した。

（6）第一一話の和訳は、参照文献に挙げた、岡野 (2016) の論文にある。

（7）原文において、複数ある長い修飾句がどの語に懸かる文構造であるのか、修飾・被修飾の関係を正確に示したい箇所では、複数の修飾句には (a) (b) (c) …の記号を付け、それらの複数の修飾句が懸かっている一つの語句（被修飾語）に、傍線を引いた。日本語には英語やドイツ語と違って、梵文の語順を絶えずひっくり返すことをしなくても、なんとか原文に近い形を保ったままでも飜訳できるという長所があるので、原文がもつ文の構造も伝えるため、飜訳として無理がない限りは、日本語がもつその長所を活かすように努めた。例えば、第四話の最初に出てくる、「飛び回る蜜蜂の群によって歌うかのような〔騒めきの〕音を立てられている花咲く蔓たちと接触したことにより芳香をもつにいたった風によって震わされている滝の水に周囲を洗い清められた岩の板がある、」や「岸辺の樹々の蔓の若枝たちによって〔素早い走りが〕顕かされている小川の波によって打たれた睡蓮から〔生じる〕白い泡の冠によって美しく飾られた水がある、」という表現のように、作者が意図した、次から次へ出来事が継起してゆく流れを楽しむ文の面白さを、原文の語順を日本語訳でもそのまま保つことによって、読者に伝えることが出来る。この文をもし英語にすれば、語の配置が逆転して、出来事の継起が因→果の順序ではなく、果→因の順序になってしまう。

（8）蔵訳では梵文とは違い、「文殊師利法王子に帰命したてまつる」とする。

（9）愛神カーマは、釈尊の成道を妨げた魔（マーラ）と同一視される。

（10）ここで『仏陀の前生話』と訳した原語は、buddhāvadāna（仏陀のアヴァダーナ）であるが、その言葉はアヴァダーナ（業報話）という枠の中の、釈尊の前生話の部類に属するアヴァダーナを意味し、ジャータカとほぼ同じ意味である。

（11）つまり、女たちはわざわざ鏡を持たなくても、水晶で出来た壁を鏡にして化粧しているため、手は疲れることはなかった。この第二詩節は王の宮殿内の描写によって、富の豊かさを表現しており、後の三＋の散文で「このように富の豊かさと武勇とを発現する王」という文の、「富の豊かさ」（vibhūti）の例示にあたる。第三詩節は「武勇」の表現である。

（12）原文の svasisya を *susisya と読んだ。

（13）あるいは別の解釈として、「まるで白く輝く鉄鎖を壊すように〔白い〕蓮根を踏みつぶしている」。

（14）本作品第一話で、このように菩薩の「六波羅蜜」の行についての基礎的な知識を聴衆に与えるための簡単な問答がわざと置かれ、多くの聴衆と同様に「菩薩の行為」に無知であった主人公の光明王が、仏への信仰に目覚めて、自らも仏になろうと誓願を立て

て一人の菩薩になる場面が描かれていることに、作者ハリバッタのこの第一話製作の意図を感じることができる。本話は、聴衆のためにジャータカの「仏をめざす菩薩の生き方」を全説話を通して具体的に示さんとする本作品の出だしにふさわしいものである。

(15) 「大地の上の王冠〔のような都〕」と訳したこの箇所は梵文が蔵訳と一致しない。蔵訳の文のほうが本来の伝承に近いと思われるので、ここは蔵訳によって訳した。梵文を訳せば、「賢者の群の隠遁所〔のような都〕であり」。

(16) 原文の **dipter** を ***dipte** と修正して読んだ。

(17) 第二話のこの最後の散文の前と後の位置に挿入する意図をもって、ネパール写本Aの余白には、後代の付加と思われる四詩節が記されている。最後の散文の始まる前の位置に挿入されるのが、付加一と付加二の詩節であり、その散文が終わった後の位置に挿入されるのが、付加三と付加四の詩節である。それらの四つの付加詩節の飜訳は次のとおり。

ブラフマダッタ王が逝去された後、家臣と大臣たちによって、法を愛する者であるスプリヤが〔王となる〕灌頂を受けました。〔付加一〕

正法によって久しく閻浮提にいる人々を守護した後、長男を王位に就け、〔死後〕ブラフマー天の都城に去って行きました。〔付加二〕

その時スプリヤが私であり、大商人〔のマガ〕がシャーリプトラでした。その時ターラークシャがデーヴァダッタであり、馬がマイトレーヤでした。〔付加三〕

ヤクシャ（夜叉）のニーラダがアーナンダであり、蛇のアグニムカがマーラでした。また精霊の女はカーシャパ（迦葉）仏であるとお知りなさい。〔付加四〕

この付加四の詩節には、ハリバッタの本話には出てこないニーラダとアグニムカという固有名詞が出てくる。これは内容的に不適切であり、別の伝承を見て作られたことが明白である。これらの四つの詩節は蔵訳に無く、ハリバッタの真作ではありえない。

(18) 原文の **vittagaḥ** は辞書にない語であり、蔵訳は **nor ni sbyin pa po** と訳す。蔵訳者は **vittagaḥ** を ***vittadaḥ** と読んだのか。

(19) 「説かれた」と「昇った」の両義がある **udita** の語の言葉遊び。

(20) この第三話二二詩節の内容は布施・持戒・精進の三つの波羅蜜を語り、不滅の境地（仏の位）をめざす菩薩の行いの基本を説く。この婆羅門が説いた一詩節は、梵文『アヴァダーナシャタカ』三八話にある、菩薩思想が見られない一詩節（**ed. Speyer, I, 220**）とは全く違う。また『撰集百縁経』にある二詩節（大正蔵四、二二〇上）とも全く違っているが、その二詩節は内容としては、

菩薩行を説いている。

(21) 驚愕したインドラ神が雨を降らし、飢饉が解消する。

(22) タクシャシラー（現在のタキシラ）の古代の都の全体的なかたちが、古代インドの特有の化粧として、女の頬などに栴檀の練香油で描かれる「葉の装飾文様」(pattralekhā) の葉の形に似ていると私は解釈した。中央の大通りから多くの細い道路が左右に走っている都市の姿は、葉脈をもつ一枚の葉のイメージを思い浮かばせる。

(23) 『大唐西域記』巻三によれば、玄奘が訪れたタクシャシラーの都の北十二、三里の場所には実際に月光王の塔が建てられていた。その実在の塔をここで予言という形で言及している。その「捨頭ストゥーパ」と呼ばれる塔の傍にある僧伽藍には、経量部のクマーララータ論師が住んでいた。季羨林等校注『大唐西域記校注』、新文豊出版公司、中華民国、一九八七年、三〇四頁以下。

(24) この第五話第三二詩節の後に、梵文テクストには欠けている一詩節が、蔵訳には存在する。しかしその詩節は、第三四詩節と内容が部分的に重なるため、やはり無いほうがよく、梵文の形に従うべきである。その詩節は、蔵訳から訳せば、次のとおりである。

「轟く海辺という姿を見せて大地は震動し、神々も驚愕しました。天と地、諸方の空間は辺際まで、芳香に満たされました。マンダーラヴァ花の雨が王の遺体の上にふり注ぎました。」

(25) この第五話の末尾には二つの梵文の詩節（第三九と第四〇）が、恐らく後代に付加されたものとして、存在する。しかしこの二つの詩節は蔵訳もあるので、蔵訳がなされた十二世紀以前に、インドで伝承された写本にすでに存在していたのであろう。飜訳は次のとおり。

あらゆる聖者中の聖者であり、輪廻における大苦の連続に打ち克った方である世尊は、このジャータカをお語りになりました。〔五·三九〕

その時の月光王が私（釈尊）です。シャーリプトラが大臣であり、デーヴァダッタが婆羅門でした。〔五·四〇〕

参照文献

Hahn, Michael (1981): "Das Datum des Haribhaṭṭa.", in: *Studien zum Jainismus und Buddhismus: Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf*, ed. Klaus Bruhn and Albrecht Wetzler, 107-120. (Alt- und Neu-Indische Studien 23). Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.

—— (2006): "How It All Began: The Very Beginning of the Buddha's Bodhisattva Career. 1. Haribhaṭṭa's Version of the Prabhāsa Legend", *Journal of Buddhist Studies* (Centre for Buddhist Studies, Sri Lanka) 4: 1-81.

—— **(2007)**: *Haribhaṭṭa in Nepal: Ten Legends from His Jātakamālā and the Anonymous Śākyasiṃhajātaka.* Editio minor. (Studia Philologica Buddhica, Monograph Series 22.) Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

—— **(2011)**: *Poetical Vision<s> of the Buddha's Former Lives: Seventeen Legends from Haribhaṭṭa's Jātakamālā.* New Delhi: Aditya Prakashan.

Hahn, Michael & Lohöfer, Helga (2016): *Haribhatta: Jatakamala. Legenden von den Vorleben des Buddha; ein wiederentdeckter Schatz altindischer Erzählkunst*, herausgegeben von Michael Hahn unter Mitarbeit von Helga Lohöfer. Heidelberg: Draupadi Verlag.

Handurukande, Ratna (1972): "The Avadānasārasamuccaya", in: *Studies in Indo-Asian Art and Culture. Vol. I, Commemoration Volume on the 69th Birthday of Acharya Raghu Vira, ed. by Perala Ratnam,* New Delhi, pp. 79-89.

Khoroche, Peter (2017): *Once a Peacock, Once an Actress: Twenty-four Lives of the Bodhisattva from Haribhaṭṭa's Jātakamālā*. London / Chicago: The University of Chicago Press.

Straube, Martin (2009): *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṭṭas Jātakamālā,* Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

岡野潔（二〇一六）：「Haribhaṭṭajātakamālā 第一一話『鹿ジャータカ』和訳」、『南アジア古典学』一一号、二〇一六年七月、一〜一六頁。

外薗幸一（一**九九**三）：「シャーキャシンハジャータカ」の和訳研究」、『地域総合研究』一九巻、二三三五〜二六〇頁。

※本研究は科研費（17K02217）の助成を受けたものである。